

市立大町山岳博物館 企画展

きた やまうど けいふ
北アルプス 山人たちの系譜

かもんじ しな えもん きさく どうじょう はいけい
—嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—



主催：市立大町山岳博物館
会期：平成19年1月27日～3月25日
会場：市立大町山岳博物館 特別展示室・ホール

市立大町山岳博物館 企画展

きた やまうど けい ふ
北アルプス 山人たちの系譜

かもんじ しなえもん きさく どうじょう はいけい
—嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—



市立大町山岳博物館

市立大町山岳博物館 企画展

きた やまうど けい ふ
北アルプス 山人たちの系譜

かもんじ しなえもん きさく どうじょう はいけい
—嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—

- 主催 市立大町山岳博物館
- 後援 信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 中日新聞社
読賣新聞松本支局 毎日新聞松本支局 産経新聞社長野支局
大系タイムス株式会社 民友信州 市民タイムス FM長野
SBC信越放送 NBS長野放送 (株)テレビ信州 長野朝日放送(株)
アルプスケーブルビジョン(株) 大町市有線放送電話農協
- 会期 平成19年1月27日(土)～3月25日(日)
(会期中の月曜日、祝日の翌日は休館。ただし、月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 会場 市立大町山岳博物館 特別展示室・ホール
- 観覧料 大人400円 高校生300円 小・中学生200円
※常設展と共通、30名様以上の団体は各50円割引
そのほかの各種割引については窓口でお問い合わせください

- ・表紙 上條嘉門次 嘉門次小屋前にて 大正3年(1914)八木道三撮影 (上條輝夫氏提供) 部分
遠山品右衛門 大正初頃(当館蔵) 部分
小林喜作 槍ヶ岳山頂にて 大正5年(1916) (小林貢氏提供) 部分
- ・裏表紙 伝 小林喜作使用 輪標(当館蔵)
- ・屏写真 伝 遠山品右衛門使用 肩掛(当館蔵)

目 次

こあいさつ

山岳文化都市宣言

解説 山案内人 —嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景— / 菊地俊朗	6
展示構成	16
北アルプス 山人たちの系譜	17
関係史跡等紹介	20
展示資料図版	25
展示資料目録・資料解説	29
関係略年表	41
参考文献	45

コラム① 山人と初期の山案内人 —山の知恵の継承—	19
コラム② 山人たちの登山の知恵と力 —小林喜作 最後の狐の足跡から—	24
コラム③ ニホンカモシカ —狩猟と保護—	29
コラム④ ツキノワグマ —人との共存をめざして—	30
コラム⑤ ライチョウを食する	31
コラム⑥ イワナ —在来種の未来は?—	32
コラム⑦ 高山植物と薬草採取 —コマクサを中心にして—	33

凡 例

1. 本書は市立大町山岳博物館において、平成19年1月27日(土)から3月25日(日)まで開催する企画展「北アルプス 山人たちの系譜 —嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—」の展示解説書である。
2. 写真や図表などの図版に付した番号は展示写真・図表パネルや展示資料の解説プレートの番号と共通するが、必ずしも展示の順序を示すものではない。
3. 資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図る等のため変更した。
4. 会期中、一部展示替えを行なう場合もある。
5. 本展ならび本書内で用いた「山人」という語句は、ここでは狩猟・漁労・採集のために山へ入り、山の幸を得て生活の糧としていた人たちの総称として用いた。具体的には、山麓の集落に住み、山の地理に精通して山中での暮らしに熟練した地元の猟師や樵などをさす。なお、読み仮名については、「やまひと」「やまびと」「やまんど」「やもうど」など様々あるが、ここでは百瀬慎太郎著「案内人風景」「文藝春秋」(1931)〈近藤信行編「山の旅 大正・昭和篇」(岩波書店、2003)〉にしたがい「やまうど」という読み仮名を用いた。
6. 企画展開催にあたり、山岳ジャーナリスト・菊地俊朗氏にご協力をいただき、本展の総論として菊地氏に本書の解説をご執筆していただいた。
7. 企画展の企画は当館館長・柳澤昭夫、副館長・宮野典夫、庶務・平林恵理子、合津明、学芸員・清水博文、千葉悟志、関悟志による。本書の各コラムの執筆は柳澤、宮野、清水、千葉、関がそれぞれ担当した。なお、企画展の準備および本書の編集、北アルプス 山人たちの系譜、関係史跡等紹介、展示資料解説の執筆ならび関係略年表の作成は関が担当した。

ごあいさつ

このたび、当館の平成18年度企画展として、北アルプスの「山人」^{やまうど}をテーマにした企画展を開催する運びとなりました。

大正時代に入るまでは十分な地図や山の案内書はなく、北アルプスにおける登山といえば夏山中心で、ルートを探しながらの探検的な登山が主でした。そのため、当時の登山には山を案内する者の同行が不可欠でした。このころ、登山者を案内したり登山の助言をしたりしたのは、山の地理に精通し、山中での暮らしに熟練した地元の猟師や樵^{きこり}など山人とよばれる山の幸を得て生活の糧としていた人たちが中心でした。

北アルプスの山人として広く知られるところでは、信州は安曇村^{しんしゅう}島々（現長野県松本市安曇）の^{かみじょうかもんじ}上條嘉門次、^{おおいで}野口村大出（現長野県大町市平）の^{とおやましなえもん}遠山品右衛門（本名里吉）、^{さとしら}西穂高村牧（現長野県安曇野市穂高）の^{こばやしきさく}小林喜作の名が挙げられます。かれらは登山者に請われれば猟や山仕事の合間に山を案内し、登山の助言をしたりもしましたが、いずれも北アルプスを生活の場としていました。

かれら三人が持ち合わせていた狩猟の技術などは、生まれ育った山の集落に何世代にもわたって綿々と継承された山の知恵によるところが大きかったといえます。そうした山の知恵はかれらから次世代へも引き継がれ、後に誕生する近代登山における山案内人たちにも大きな影響をあたえたと考えられます。こうした流れをひも解いていくと、そこには「系譜」と呼べるような一連のつながりが表れてくるのではないのでしょうか。

本展は「第1部 山人の源流」「第2部 嘉門次、品右衛門、喜作の登場」「第3部 系譜をたどる」の3部から展示を構成しています。ここでは、嘉門次、品右衛門、喜作を中心に、北アルプスの長野県側を拠点に暮らしした山人たちに焦点をあて、かれらが使ったと伝えられる道具などの関係資料を展示して紹介します。これにより、山人たちの山での暮らしを推測するとともに、山人としての嘉門次、品右衛門、喜作の実像に迫り、かれらがその時代に登場することになった背景について探ります。そして、かれら三人が持ち合わせていた山の知恵を継承した次世代の猟師や山案内人たちの系譜をたどります。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご出品いただきました所蔵者の皆様ならびにご協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申しあげます。

平成19年1月27日

市立大町山岳博物館

山岳文化都市宣言

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人とは共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人とは共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

平成14年3月15日

大町市



解 説

山案内人 —嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—

菊 地 俊 朗

1. はじめに

外からの記録による人物像

北アルプスを舞台に、明治期以降展開されたいわゆる近代登山史で、格別にその存在を強調される三人の信州人^{やまうど}山人がいる。上條嘉門次(1847-1917)、遠山品右衛門(1851-1920)、そして小林喜作(1875-1923)である。

嘉門次については「上高地の主」「穂高の仙人」「南のおやじ」、品右衛門は「黒部の主」「山の親父」「仏心をもった山の主」、喜作は「山の神」「アルプスの名物男」ともいわれた。「喜作新道」の著者山本茂美は文中、「山庄屋のとしての威厳」とまで表している。

こうした評価、寸描は百年前後の時を経て、ほぼ定着したかのように語られ、レポートされている。決して的はずれとは思えない。とはいえ、北アルプスの山麓に居を構え、浅学ながら地元視点から検証的に見直してみると、幾点か補足しておいた方がよさそうに思えることが浮かぶ。何よりもまず、一連の評価、記録が、地元と日常的に接触のない首都圏や関西などの外来者によるものが大半であることを指摘したい。当の本人の言葉や記録はほとんどないのである。実は、当人たちが“文盲”であったからやむを得ないのだが、歴史の片面のみが語られている懸念を感じるのである。

登山世界の特異性

登山を趣味している人なら気づいていよう。基本的に登山とは“観客のいない遊技”である。スイス・アルプスのアイガー北壁の登はんのように、麓から望遠鏡で目視可能なケースもあるが、これは例外で、登山過程の報告はほとんどがパーティーや個人からの自己申告による。当然、表現の強弱、認識の個人差が生じる。しかも、天候や季節によって登る条件は大きく異なる。陸上競技と違ってタイムレースではない。同じコースを登っても、報告や印象に競技とは違ってかなりのブレが生じ易いのである。

山行記自体も総じて感傷的になりがちである。山行が自然の内懐に抱かれるのを求める一面があるのだから、当然といえば当然だが、応々にして誇張的と思える報告に接する。まして「近代登山」が始まったとされる明治30年前後から戦前にかけて、登山者の中心は若者、とくに大学山岳部員らであった。

もっともこの時代の若者は、昨今の同世代に比べると相当大人びていたし、知識や研究心も旺盛だったように思える。エリート意識も強かった。案内人や人夫を連れての“坊ちゃん登山”の印象もある。戦後、外務大臣を歴任した藤山愛一郎は、慶応大予科1年の大正6年(1917)、嘉門次の案内で槍から裏銀座を縦走した。この時嘉門次は69歳、黄だんで死去する3ヶ月前。最後の案内になったのだが、藤山の山行記は「峠(徳本峠)の上で上高地から登ってきた嘉門次君が『よくいらした』と迎えてくれた」から始まり、文中、「君」の連発である。

彼らが案内人や人夫をどういう目で見っていたか、中には年長者なのに呼び捨て文も多い。雇い人であることは違いないが、ヒマラヤ登山のシェルパと同じように、主従関係としてとらえていた一面がある。が、数日の山行の中で感化を受け、尊敬のまなざしを向けるようになったり、他人の紀行文から嘉門次らの評価を知ると、「翁」をつけて紹介するなど呼称も一定でない。そうした過程で虚像と実像が交差していることもうかがえる。

もっとも、大町市が生んだ“山の文人”であり、「大町登山案内者組合」の創始者でもある百瀬慎太郎は、「案

内人風景」の中でこう述べている。「結局^{やまうど}山人である彼らにとっては登山者の知識、技術、セオリー通り追付いてゆく術はないのだ。ある人にとって^{すべ}は彼らは、既に案内者ではあり得ない。ポーターにしか過ぎない…」と。

登山者にとって北アルプスが未知、未開だった短い期間が過ぎると、学習した彼らの前に山人の存在は、さほど重いものでなくなったのである。しかし、それ以前の地図のない時代に、北アルプスをわが家の庭のように歩き回り、猿のように岩場をこなす特定の山人は、驚異の目でとらえられた。三人を筆頭に立山や白馬方面の初期案内者の名が残される結果になった背景がある。

2. 入山口集落

町村合併のくり返しとモータリゼーション時代の到来で、島々、牧、大出といった地名は、最近の登山者や観光客の記憶地図から消えつつある。しかしこの3つの集落は、少なくとも大正期までは北アルプスに入山する登山者や山仕事をする人たちにとって、よく耳にした重要な拠点だった。

上高地は島々のものせ

まず島々。平成18年来、人口2,000余人の旧安曇村は松本市に編入合併したが、梓川の深い谷筋に下流から大野田、島々、稲核、大野川の4集落を主として点在する。ところが梓川は、島々から上流は大きく南へふくらみ、長々とした懸谷を刻んで上高地に達する。その手前には難所の釜ヶ淵もある。今でこそ車道が川沿いに通じているものの、梓川沿いのルートでの入山は、距離と危険性の両面から敬遠されていた。

稲核からの山越え道も開発されたが、意外にも下流の島々から島々谷川に沿って徳本峠(2,135m)越えて明神に下りるルートが一番の近道だった。といっても片道6~7時間は要する。

江戸中期以降、松本藩は城下町松本の整備の用材やエネルギー源の薪を、おもに梓川という自然の運送路がある上高地周辺に求めた。旧安曇村の住民は毎年、200人を超える杉を半年間も山へ送り込み、米にかわる年貢として屋根板用の樽木や薪などを中心に、大量の木材生産にあたった。杉小屋は十数カ所にも達し、上流では槍沢に近い二俣付近にまで及んだ。徳本峠道は、仕事場へのメインルートだったのである。

嘉門次は稲核の“枝村”明ヶ平の生まれだが、21歳の時、1kmほど下流の島々の「御判屋」こと上條孫次良のところへムコ入りし、茂を嫁とした。すでに10歳で杣見習いのカシキ(炊事係)として上高地に入山、16歳からは松本藩の山林見廻り人夫助手として、夏の間は山暮らしの経験を積んでいた。ムコ入りもそうした実績や働きぶりを評価されてのことだったのだろうが、島々を実家にしたことは、彼の山人人生をより確定的にしたといえる。

今でも地元の人の間では「上高地は島々のものせ」という会話が聞かれる。実際、一部の“村外資本”によるホテル、旅館は別にして、上高地の宿や観光にかかわる人たちは島々出身者の系譜が主流を占めている。

“地勢の妙”が味方した牧村

牧の地名は、松本地方の住民でさえ知らない人が多い。常念岳と蝶ヶ岳を源流にする烏川が、安曇野に流れ出す手前の左岸、浅川山(1,743m)の山裾に展開する。今は安曇野市穂高だが、平安期に開かれたという信濃十六牧の1つ猪鹿牧村と草深村が、早々と江戸期に合併して以来の名である。

ここでも“地勢の妙”がからむ。常念岳の北隣の燕岳などの水を集める中房川は、浅川山の北側をまき、安曇野の有明へ注ぐ。ところが、里に出る手前の宮城から上流が懸崖で、大正期に水力発電所建設用の道が開かれるまでは、一般の通行は無理だった。中房温泉へは、牧から集落の間を流れる川窪沢川沿いに浅川山の中腹をのぼって、標高ほぼ1,900mもの大峠に達し、そこから中房温泉の4kmほど手前の信濃坂に下降していたのである。

中房温泉一帯では、染色などに利用されたミョウバンを産出した。江戸下期には湯治客もいた。ミョウ

パンや温泉の利用権は、現在、中房温泉を営む百瀬家が得ていた。産出するミョウパンを大峠越えて牛や人の背で運んだ。それらの仕事をおもに牧の人たちが担っていた。とくに集落の中心地からさらに2km近く大峠道を上った、喜作の生まれた門前山崎地区は耕地も少ないこともあって、ほとんどの家が山仕事を生業にしていた。

喜作は燕一大天井一槍ヶ岳の表銀座コース、いわゆる喜作新道の開道(大正10年)で名を残したが、他に常念小屋の開業(大正8年)のさい、一ノ沢一常念乗越一ノ俣一中山一ニノ俣コースの初期整備にも当たっている。つまり牧は、大峠と一ノ沢のいずれへも入山口なのである。喜作新道ができる前の一時期、槍への登路だった東天井と常念乗越の間から牧へ下降できる猟師道もあった。

松本藩が享保9年(1724)にまとめた信濃の国の歴史と地誌資料「信府統記」には、牧村には貞享5年(1688)現在で、猟の鉄砲が5丁ある、と記されている。同地区の歴史に詳しい地元、本牧の宮島夏樹さん(78)によると、猟銃の免許は庄屋名義だった。それを猟師の多い山崎地区(約30戸)などに名義の“又貸し”していたという。ここの猟師らは時として、隣村で田畑を荒らす鳥獣を追い払うアルバイトもしていたらしい。寛政12年(1800)には野口入(大町市)方面で、クマ10頭を獲ったとの記録もある。

北アルプス南部に入りやすい牧には、猟師のノウハウが引き継がれてきた。喜作の“猟の師匠”は為右衛門一という記録を読んだ記憶がある。しかし、為右衛門とは誰か、心あたりの山岳通に聞いても確認をとれないでいた。ところが「灯台下暗し」で、山案内の長老で知られる牧の藤原夏雄さん(91)と話していたら「私の親父、為一郎の別名だ」と断言した。それなら話がわかる。夏雄さん自身、昭和40~50年代、涸沢を拠点にする長野県の山岳遭難対策の常駐隊長を長く勤めた。それ以前は猟師やポッカ、山案内もした。貴重な山人の末裔である。喜作が牧から誕生した事情の一端が理解できよう。

「立山裏街道」と大出

品右衛門が生まれた大町市野口の大出は、扇沢からの籠川と合流したばかりの高瀬川が里に姿を見せる左岸にある。大町駅から6kmほど。市街地の西端である。もちろん、明治期までは人家もまばら。100戸ほどの野口村の、その“枝郷”だった。

山つきに近く標高も高いので、水が冷たい。大町周辺の農家は、雪融けの冷水の水温を上げるため、ため池や遊水路をつくり、米の収量を上げる工夫をこらす歴史を刻んでいる。大出の地名は地下水が大量に湧き出ることから、といわれるが、大出はあまりにも山に接近しているので、その工夫すらむずかかった。

当然、生計は山仕事に頼った。野口村が松本藩の御林の管理を請け負い、伐採木の加工や払い下げを優先的に認めてもらっていた。地元の庄屋に残された古地図を見ると、とくに高瀬入と籠川に流れ込む沢の名が詳細で、小屋の存在も5つ6つ、しっかりと記載されている。上高地の梓川ほどでないにしろ、野口村もまた柚村だった。木地師も住みついていたらしい。高瀬入の奥、湯俣の上部には、硫黄の「いり小屋」も記載されている。若干の硫黄掘りも行われていたとみられる。

そんな寒村の名を知らしめる著名な伝承がある。富山城主佐々成政による天正12年(1584)の針ノ木峠越えである。

成政の針ノ木越えは冬場のことだけに、真偽については諸説ある。それはさておき、このルートが少なくとも無雪期は、戦国時代以前から利用されていたことは間違いなさそうだ。江戸中期以降、後に品右衛門が小屋を設けた黒部川の平をはじめ、ルートの核心部の越中側を、加賀藩が「御縮山」に指定して一般の立ち入りを禁止していた。ところが猟師や柚、あるいは立山詣の信者たちが、こっそり利用していたとみられるのである。信州から立山へ行くのに、このルートを使えば確実に2日は短縮できる。「立山裏街道」と呼ばれ、立山詣の先達に依頼している富山側入山口の芦崎寺の特定の坊の名をいえば、通行も目こぼし願えた、との話も伝わる。

大出にはもう1本、糸魚川街道の脇往還が通っていた。大町市街を通る本街道とはなれて北アルプス際

の山付きの道である。大出のやや上流の現東京電力テプコ館付近には、高瀬川を渡る定橋もあった。つまり大出は立山裏街道と脇往還の十字路。通る旅人は少なかったとはいえ、山道の要衝だった。

品右衛門の姓は「遠山」である。いかにも山と縁がありそうである。系図がしっかりあるわけではないが、品右衛門から四代目の茂雄さん(78)によると、伊那谷の旧南信濃村＝現飯田市＝一帯の遠山一族とは祖先を同じくするという。大出の遠山家は10軒ほどだが、今でも年に1回、一族が集まり「遠山祭り」を継続している。品右衛門の息子たちと同じ世代で、猟師で知られた遠山林平も隣家の出。一族である。大出には山人の血が流れている。

3. 時代の風

猟師が“本業”、山案内はバイト

嘉門次、品右衛門、喜作の名は、主として明治30年前後から大正期にかけて北アルプス登山をした日本山岳会の初期メンバーや、ウェストンを筆頭に山旅好きの外国文化人らの紀行文によって紹介された。彼らが三人を山案内人として雇ったり、ルートを質したりしたので、三人のイメージ、職業は、案内人として受けとられたのは自然であろう。

しかし、例えば品右衛門。彼のガイドらしい記録はわずか1件しか見当たらない。それも明治44年(あるいは43年)10月、当時34歳の長男の作十郎ともども18歳だった大町・對山館の百瀬慎太郎を、黒部川畔の彼の「平の小屋」まで連れて行っただけである。翌日には本人は同行せず、作十郎をつけて慎太郎を下山させている。これをガイドといえるかどうか。

品右衛門は「わしは案内をしない」と公言していたようだ。行き会った登山者に道を聞かれれば教え、彼の小屋に泊った人には山の状況を話した。が、品右衛門の名がクローズアップされたのは、嘉門次などが登山者に「黒部一帯のことは品右衛門に聞け。シナエム(通称)は隅々まで知っている。“黒部の主”じゃ」と語ったことが喧伝され、仙人らしい風ぼうや、ひかえめな人柄とあいまって、嘉門次と比較される形で案内人のイメージが広まって行った、と考えられなくはない。

品右衛門は嘉門次より4歳年下である。しかし、山籠りを始めたのは明治8年(1875)、24歳ごろからで、嘉門次が34歳の同13年(1880)、明神池畔に小屋を構えた時より、単身の山暮らしは実質5年先輩だった。猟などで時たま出会った嘉門次が、年下とはいえ、“敬意”を見せたのも理解できよう。

嘉門次も品右衛門も、無雪期の日常はイワナ釣りと、その薫製づくりに明け暮れていた、とみていい。嘉門次は明神池や梓川で、品右衛門は黒部川や東沢などで、1日に100匹前後は釣ったらしい。川に入るとイワナがぶっかってきたといわれるほど、当時はイワナがあふれていた。彼らは釣る時間より、いろいろ端で薫製にする手間の方が時間を要したらしい。1週間から10日もすると、500匹前後の薫製ができ上り、それを背負って自宅へ3～4日戻り、食料などを補給して帰るサイクルだった、とみられる。

クマやカモシカ、サルを獲る本格的な大型獣の猟は、冬場や春先の残雪期だった。積雪量が4～5mにも及ぶ黒部では完全越冬はむずかしく、雪がしまる春先まで品右衛門は大出の自宅を拠点とし、大町周辺の信州側での猟に集中したようだ。嘉門次には雪に覆われた明神の小屋での写真が残されている。しかし、正月は島々の自宅で過ごすなど、完全にフルシーズンの越冬ではなかったように思われる。

喜作は二人の先輩と違い、常住の小屋をもたなかった。雪崩のため大正12年(1923)の3月5日、長男一男ともども圧死した爺ヶ岳西面の棒小屋沢などに、仮の猟小屋は用意していたが、“常用”ではなかった。

喜作は50年に満たない人生で、実質約30年の間に仕留めた動物がクマ300頭、カモシカ2,000頭などといわれる。他にサル、キツネ、タヌキ、ウサギ、テン、それにライチョウ・・・と獲りまくった。対して嘉門次はクマ60～80頭、カモシカ500頭、品右衛門も嘉門次に準じた数が想定されている。喜作が圧倒的に多い。喜作が稀代の名猟師といわれるゆえんでもある。

ただこれらの数字には、首をかしげる地元関係者が少なくない。そうした見方が生まれるのは、猟は仲

間を組んで行う場合が多い。獲れた数が特定の人に加算されているのでは？ という疑問だ。クマの場合はハチミツをおとりにして、「押し」と呼ばれる仕掛や落とし穴に捕獲した上で、槍で突いたり、銃でとどめを刺すケースも多い。「〇〇さあのクマの数は、毛の数じゃねえかい」などの皮肉が聞かれる。

嘉門次がクマ穴にもぐり込んで、冬眠からさめやらぬクマを背中の上を歩かせて追いたて、外に出たところを仲間撃たせたなどの話が伝わる。真偽は確かめようもないが、山人の話はとかく誇張的、面白おかしく伝えられる傾向がある。

とはいえ、抑制的見方をふまえても、喜作の行動力と“実績”はすざまじいものがある。彼が常住小屋をもたなかったのは、牧の伝統的縄張りを越えての岳越しの猟だったことも理由の1つであろう。現に彼が墓所とした棒小屋沢は遭難直後、「北」の領分とする見方も流れた。この時は7人で出かけ、1カ月近い行程だったが、すでにカモシカを30頭近く獲っていた。

嘉門次と品右衛門はイワナ釣りを主とする定住的狩猟だったのに、喜作は値の高い“大物獲り”に狙いをしぼっていたのである。移動性を重くみていたのだろう。二人と20余年、時代がずれたことで、銃も火縄銃から村田銃の登場と、性能も格段と上ったこともあろう。

幾つかの資料で判断する限り、三人とも身長は高くない。160cm 前後でなかったかと思われる。現在、大出の品右衛門の生家に住む四代目遠山茂雄さん(78)は「私の体格が品右衛門そっくりといわれています」と話すが、身長160cm 体重50kgとのこと。小柄のマラソン選手体型である。小さくても三人は体力があった。とくに喜作の体力は、槍ヶ岳山頂へ60kmを超える標石を運び上げた実績が示すように抜群だったようだ。

三人とも“本業”は猟師。山案内はアルバイトだったのである。名案内人の評価の高い嘉門次は明治18年(1885)、地質調査の農商務省技師坂市太郎を槍ヶ岳-鷲羽-薬師のルートで案内したのが記録の最初。次いで同26年、よく知られる館澤彦の前穂高岳への三角點選点登山、そしてウェストンを槍ヶ岳へ案内したが、記録で見る限り彼の案内は、60歳前後からの晩年の10年間に集中している。その数も記録上は20回に満たない、とされている。他に明治初、中期に姿を見せていたお雇い外人、ガウランドらを案内したとの見方もある。いずれにせよ、当時は、案内を本業にするには登山者は少なすぎた。ガイドだけで生計を立てるのは、鋭峰の少ない日本の場合、大衆登山時代の最近でさえなかなか難しいのである。

奥山に明治維新の余波

明治維新の余波は、北アルプスの最深部にも寄せてきた。版籍奉還の結果、従来の加賀藩、松本藩、糸魚川藩などの藩領だった地域が、だいたい国有林になった。入山がしやすく、入会地、共有林の面積が多かった志賀、中信高原、八ヶ岳、秩父、南アルプスの前山などと違い、「御林」として囲い込まれていた北アルプスの奥地は、ほとんど国有林に指定されたのである。

そのことは藩による立入禁止令が解けたことを意味した。江戸期でも藩の許可による山仕事や、時として密猟的入山も行われていたが、とにかく国の土地なら山に入っても咎めはあるまい、との空気が一部の山村に広まった。

一方で明治政府は、例えば上高地一帯の伐採が幕末までに進みすぎ、災害を誘発する心配があるうえ、国有林の管理方針が固まっていないこともあって、とりあえず禁伐命令を出した。困ったのは山仕事で生計を立てて来た旧安曇村の住民である。養蚕に力を入れるかたわら、「何とか従来どおり伐採を認めて」と陳情をくり返した。

そうした中でまず動きが出たのは、針ノ木峠越えて大町と芦峯寺を結ぶ「立山裏街道」を整備して牛馬の通れる「信越連帯新道」を建設しようとする構想だった。大町市文化財センターの相澤亮平さんによると、すでに嘉永年間(1848~54)に、大町の一部の人たちが独占的な糸魚川ルートの商品に対し、能登塩や富山湾の魚を選び込むねらいで松本、加賀藩に申請した経過がある。それは不許可になったが、今回は大町

地方の6人の庄屋、富山側では61人の士族らが資金を出し合い、明治9年に着工、同11年、全長82kmの新道をひとまず完成させた。

品右衛門がその新道の要衝、黒部川の平の渡しに、小さな釣り小屋を造ったのは着工前年の明治8年である。30年ほどして営林局に借地代を払うようになり、正規に小屋の権利を認められることになるが、当初は無断だった。彼が新道構想を承知していたのかは確認できないが、噂くらいは知っていたろう。それに信州側の古地図だと、信越の国境は平川(黒部川のこと)とあり、江戸期に信州側の猟師たちがこの一帯にまで進出していた記録は幾つか残されている。

品右衛門の小屋は、さっそく工事関係者に利用された。彼自身も新道工事の手伝いや、工事作業員へのイワナの調達でかせいだとされる。しかし完成した道幅2~2.7mの“有料”新道は、ひと冬越すと雪崩や土砂の押し出しなどで、2年と持たず不通になった。この新道の話聞き、明治10年ごろから、英外交官アーネスト・サトウを始め、旅行好きの外人らが、針ノ木方面にやってくるようになった。登山新時代開幕の“伝令役”だった。

嘉門次が明治13年、明神池畔に小さな小屋をつくり山暮らしを始めたころは、上高地一帯の国有林の管理利用計画もはっきりしていなかった。嘉門次小屋も品右衛門小屋と同様に無許可だった。猟小屋扱いとみていい。その前後10年ほど、上高地の自然は久々の休息の時を得たのである。

しかし、穏やかな時は長続きしなかった。国が畜産の奨励に乗り出したからである。新しい“村起こし”産業を求めていた旧安曇村は、早速これに飛びついた。国と県から資金や種馬、種牛の貸しつけを受けて、明治18年、上高地の焼岳や西穂高登山口一帯の梓川右岸に牧場を開いた。

上高地の自然や景観が知られるにつれ、明治末期から観光客や登山者の入山を見込んで旅館の進出が始まった。そこで新たに人と牛、馬との共存の可否が問題化した。牛が発情期などに、時として人を襲うケースが出た。木に登って難を逃れたとか、嘉門次でさえ梓川に飛び込んだとか伝えられる。結果は、牧場地をまず明神地区に、さらに徳沢へと、順次、奥地へ追いやり、昭和9年、中部山岳国立公園に指定されたのを機に廃止された。「氷壁の宿」徳沢園は、牧場経営の中心人物だった上条百次良とその息子嘉藤次にその功績を認めて譲渡されたのが始まりである。

上高地周辺の峰々には、明治10年前後から政府が招きたいいわゆるお雇い外人や測量、学術調査の技師、学者らが入山するようになった。その際、山案内の第一候補に明神に住みついた嘉門次があげられたのは当然である。新時代の流れと嘉門次の存在がかみ合った。嘉門次の一人息子嘉代吉も日清戦争の除隊後、山案内をするようになったが、そのころから岐阜県栃尾の内野常次郎、大井庄吉らが嘉門次を見習い、“弟子入り”し、上高地に住みついた。彼らは揃って猟に出かけるようになる。前後して喜作も仲間入りしたようで、棒小屋沢の雪崩で喜作親子が死亡した遭難のさい、庄吉は生き残り組だった。

明神の嘉門次小屋については、彼が死去する3、4カ月前の大正6年7月、後に上高地西糸屋山荘を開業した奥原英男の弟洋司が、兄ともども訪ねた折の記録を残している。洋司によると、間口9尺(2.7m)、奥行2間(3.6m)で少しよけていた。その中に幅5尺、奥行1間の大きな炉がきつてあるので、寝るところがないほどで、「家よりでかいいろりだね」といったら大笑いされたという。洪水期には水がつくので、四尺ほど高く吊った棚に寝る…などと、細かい観察をしている。この小屋も品右衛門とほぼ同じ明治30年代末に借地が認められ、以後、地代を納めていた。それが今の嘉門次小屋につながる。

余談だが、白馬山荘をはじめた松沢貞逸は16歳の明治38年、白馬山頂直下に残された用済みの測量小屋の使用を申し出て認めてもらった。大正6年、槍沢に現槍沢ロッヂの前身、槍沢小屋を建てた25歳の穂苅三寿男が借地を申請したら、「あんなところに小屋を建てて何をするつもりかね」といわれたものの、約660㎡の借地をあっさり認めてもらった。嘉門次、品右衛門を取り巻いた山岳環境は、そんな時代だった。

4. 山暮らしの実情

里からはみ出た動機は

いつの時代でも、好んで奥山暮らしを求める人はまず居ない。「衣」はともかく「食」、「住」の環境が極めて厳しい。元来、「人間」の言葉が象徴するように、人は群れて生活する。隔絶した山の中での一人暮らしは、性に合わない。

ただ北アルプスの富山側、今はダムの底に沈んだ有峰集落は江戸期、不作で年貢を払えない時、幾度か“拳家逃亡”をして、人目につかない山暮らしをした歴史をもつようだ。山窩さんかの誕生はそうした流れが生んだといわれる。しかし一般的には厳しい年貢を課せられても、人々は里での農耕生活を求めて来た。

にもかかわらず粗末な掘立小屋を寒冷地に建て、単身で生涯の半分を送った嘉門次と品右衛門の山暮らしへの固執は、いかなる動機によるのか。狐小屋や岩小屋を転々としながらも、拠点の住所は里の実家にしていた喜作はやや違うが、私の知る限り彼らの動機について言及した著作はないようだ。先述したように彼らが文盲だったこともあろうが、問われてもぼかして応答していたことも考えられる。しかし、知りたい。これまで述べた三人をとりまく環境や歴史は、その回答の糸口だが、多少の推理を交えつつ、もう少し進めてみよう。

身上しんしうつぶした嘉門次

まず嘉門次から。旧安曇村誌の編纂に当たった元同村教育委員長服部祐雄さんによると、旧安曇村の村人には、一般の町村とはやや違った感覚があるという。水田が集落の近くにないので出作りが行われるが、そこに定着する傾向が見られる。いわば“転勤族”というのだ。

嘉門次がムコ入りした上條家は、「御判屋」と呼ばれ、松本藩の「告示」を集落内で管理する役割りを担当していた。総じて島々は村内で一番耕地が少なかったが、その中でもかなりの耕地をもち、立派な母屋もあった。豆腐屋もしており、山林もあったという。

嘉門次は少年時代から上高地で山仕事にあたった。16歳で松本藩の山の見廻り人夫助手に採用され、無雪期は上高地駐在をしていたくらいなので、信用のおける若者だったに違いない。「御判屋」はそんな嘉門次を見込んで養子に迎えたのだろうが、やや眼鏡違いな点があった。根っからの山好きで、当時、一般的に行われていた養蚕などの仕事は性に合わなかったらしい。

嘉門次が32歳で山籠りをはじめた明治13年(1880)は、結婚して12年。一人息子嘉代吉が誕生していたが、私の勝手な想像では、ムコという立ち場もこの決断に無関係だったとは思えない。養父はその後二十年間健在で、没後の家計も妻茂と嘉代吉にまかせていた気配がうかがえる。

ただ家長の権限は嘉門次にあった。獲物を背負って里に下りて来た時の嘉門次は、酒好きだったこともあり、近隣の人を集めての宴会話が伝わる。晩年、その「御判屋」の畑や山林ばかりか母家までも処分せざるを得ない状況になる。嘉門次の死の床は、母屋からはなれた粗まつな牛小屋だったという。

「人がよかったのか、御判屋ということで頼まれればことわれなかったのか、今でいう連帯保証の判を押し、借金のカタにとられたと聞いています」。嘉門次小屋の四代目、上條輝夫さん(63)の話。嘉門次家に残されたのは200㎡ほどの土地と小屋だった。家族の辛苦は輝夫さんの子どものころまで続いたという。それに嘉門次は人柄のよさや獵師としての腕を認められてはいるが、山暮らしで世情にうとかったのだろう。喜作のように獲物を高く売りさばく才覚にも欠けていたようだ。

山本茂美は「喜作新道」の中で、上高地「五千尺」旅館の先々代の妻藤沢タイの話として、「大正六年だったか、雪がとけて上高地へ行ったら、嘉門次爺じいさんが来てシシ(カモシカ)の皮十二枚を十二円で買ってくれという。ひと冬かけて獲ったもので、よほど銭に困っていたと思う。(爺ちゃんと相談して)十二円じゃあまりモウラシイ(可哀想だ)といって、その上へもう十円加えて買ってやった」と紹介している。カモシカの皮は当時の相場でも1枚5円前後はしていたようだ。

嘉門次に言及した著作は何点かあるが、佐藤貢の「アルプスの主嘉門次」(朝日新聞社)が突出して充実している。実は佐藤は私と同じ信濃毎日新聞社に在籍していた。私が駆け出し記者のころは定年間近かで、所属も違っていたこともあって親しく話をしてもらう機会がなかったが、山岳関連の記事を書く私を、遠くからやさしい目で見守ってくれていた記憶がある。彼が日本山岳会員で、退社後にこのような充実した嘉門次伝を上梓するとは、若い私の想定外だった。

意外に厳しい？ 品右衛門への風評

その佐藤が、品右衛門についても取材を進めていたことを最近、大町山岳博物館の学芸員を通じて知った。佐藤が集めた資料の一部は、田部重治や冠松次郎、それに大町市長を務めた縣聡などへの品右衛門の身辺への問い合わせに対する彼らの返書である。

それらを一読すると、意外なことに佐藤は、品右衛門や山案内人になった彼の三人の息子たちにかかわるマイナスの風評を耳にし、その真偽を品右衛門や息子たちと接触したと思える田部、冠らに質してしたのである。冠らは風評の一部を間接的に耳にしたことを認めてはいるものの、断定はしていない。つまり不明、というべきだろう。もう歴史の闇に消えてしまった話である。

疑念の元は、本名は「里吉」で、2歳年上のきさと結婚して間もない24歳の若さなのに、「品右衛門」と変名し、黒部の奥地「平」に籠る生活を始めた動機が何であったか、の解明に向けられていると思える。

先述したように、国の山林行政が混乱期だったにせよ、当時の“並の感覚”でも単身の奥山暮らしは理解し難かった。世間から隠遁せざるを得ない事情をかかえた人が、時たまそのような行動をしたことや、案内人や山人に仕事を得た品右衛門の三人の息子の評判が、必ずしも登山者の間でよくなかったことなどが重複したこともあって、噂の真偽を追及したのだろう。伝えられる「山仙人」のような、人柄のよい、穏やかな応接からは想像をしがたい姿である。

三俣山荘の経営者伊藤正一さん(81)には「黒部の山賊」の著作がある。戦後間もなく彼が権利を買い取った三俣小屋が、山賊に占拠されているという噂から始まる山小屋物語だが、山賊と称されていた一人に品右衛門の三男富士弥がいた。当時ですでに60代になっていた富士弥だが、伊藤さんはその印象を「とにかく口が達者だった。身長も175cmぐらいと大柄で、状況しだいでは脅しにとれる言動もあった」と思い返す。

品右衛門は小柄なのに息子たちが大柄なのは、北海道出身の妻の親族に「若島」と名乗る力士がいたといわれるので、妻の血筋によるのかも。富士弥の次兄兵三郎も大きく、村相撲の大関だったという。息子たちがいかつかったこともあろうが、半ば子育てを放棄していたような品右衛門には、親父の威厳がなかったことは推察しうる。

品右衛門と違って山案内をした作十郎(長兄)、兵三郎、富士弥の三人の息子たちは、しかし、百瀬慎太郎が発足させた大町登山案内者組合には入会しなかった。慎太郎は品右衛門親子の実情を一番よく知る立ち場にあったはずだ。慎太郎は遺稿集「品右衛門のことども」で、次のような意味深な一文を残している。

「彼はどうしても、山へ入らねばならぬ宿命によって黒部の谷へ隠生したのであった。／黒部を過ぐる案内者達は彼をお山の親父に、いやこよなき主にまでまつりあげたのであった。／私達が後年の品右衛門に会った印象は一種言ふに言われぬ彼の人格であった。／山が人をかく作ったのか、彼の心の修行がせしめたのか、とにかく晩年の品右衛門は確かに仏心を持った山の主であった・・・」と。

品右衛門の家は、佐々成政が針ノ木越えをした際、芦峠寺から山越え成就祈願をこめて運んできたといわれる大姥様をまつる西正院の裏手60~70mのところにある。作十郎が病気がちだったせいといわれるが、山を下りた晩年の品右衛門も経済的には恵まれなかったらしい。街道に面した西正院入口の一室で、ぼつぼつと通る旅人や登山者相手にワラジや枡酒を売っていた。

逆境をバネに、猟で身上持ち喜作

喜作は行動力や猟師としての技量が抜き出ていた、とする見方は定着している。山人仲間でも、一目置かれる存在だったことは間違いない。その一方で強欲だとか、人と交わらない、といった評が、とくに地元で交わされたのも確かである。こうした喜作への毀誉褒貶は、彼が逆境をバネにのし上って行った経過とかかわる一面があるように思える。

喜作の出生地、旧牧村の門前山崎は安曇野に開けた旧村の中心地に比べ田畑は少なかった。必然、貧富の差が出た。「門前」とは現丸山公晃住職(59)で三十一代を数える真言宗の古刹満願寺の門前の「山の崎」に展開する集落だからついた名だ。住民の暮らしは寺の手伝い、寺林への立ち入りも含め寺に依存した。夏場は「青もの」と呼ばれるゼンマイ、ワラビに加えてコマクサ、オウレンなどの薬草採取に精を出した。木曾の製薬業者に叩いた。冬期は炭焼きである。

しかし、クマ、カモシカなど大型獣の捕獲となると簡単でない。とくに狩猟期の冬場は専門の猟師に限られる。その中で、喜作の捕獲数は抜群だった。明治末から大正期にかけてクマは1頭で皮、胆、肉を含めて15~40円、カモシカは5~10円の相場で取り引きされていたようだが、喜作は東京、大阪方面への“直販ルート”を開拓していたようで、嘉門次のように買ったたかれることもなく、にわかには狩猟成金になった。当時、学校の理科教材にライチョウの剥製も求められ、1羽で5円にもなったという。

喜作は毎年のように2~3aずつ、里に近い田を買い求めた。喜作の三男利喜蔵と仲のよかった藤原夏雄さん(91)は「田は1ha以上になっていた」と話す。いつの間にか隣近所の嫉妬を買うようになった。そればかりか喜作の猟場が広がったので、他村の猟師に“縄張り荒し”の目でみられた。とくに隣村の有明からの反発は強く、案内人仲間でも喜作を悪し様という者もいた。

大正期に入って登山が流行の兆しをみせると、あちこちで山小屋建設、登山道整備の動きが出て来た。となると、頼りになるのは喜作一というわけで、槍沢小屋、常念小屋、殺生小屋…と、そこへの新道づくりを含めて喜作は引っぱりダコになった。喜作にしてみれば収入があればいいわけで、例えば中房温泉と常念小屋、殺生小屋と大槍ヒュッテは競合相手なのに、その辺の配慮はどうだったのか。

そうしたマイナスの影は、事実上喜作が建設にあたった殺生小屋をめぐるもうかがえる。“共同経営”と喜作はもらしていたようだが、結局、資金のスポンサーは中房温泉の百瀬家だったということで、喜作の死後、経営からはずさされている。山本茂美の著作のせいもあって「喜作新道」の名は残ったが、その命名に同調しない山小屋もある。「喜作祭り」の開催でも、地元は必ずしも一枚岩でない。

見方によっては、喜作のバイタリティーが利用されたといえなくもない。商才はあったのだろうが猪突の感もある。ただ喜作家の実情を知る藤原さんは「喜作は性格が悪かったわけじゃない。子どもらも親父譲りの力もちで、人柄もよかった。結局、カネを貯めたのが憎まれの原因だったかな…」と、喜作をかばっている。

喜作が買い求めた田畑は、とうに人手に渡っている。

仙人と犬

仙人の「仙」とは、人が山に入ると書く。道家の理想人物で、世俗を絶って山に入り修業をつむと神変自在の法術をマスターできる、とされたことによると辞書は解説する。転じて無欲で世俗にうとい人のこともいうが、山は人間を浄化する不思議な能力を備えていると、古来、認知されていたようだ。

嘉門次を「穂高の仙人」と呼び、品右衛門を「黒部の仙人」扱いしたことは幾つかの岳人の紀行文に見られる。その一例を挙げてみよう。

「(嘉門次は)一流のガイドのもつ特質である堅実で、誠実で、親切で、やさしく、他人の感情にたいして思いやりがあり、しかも非常に発達した知覚と敏捷さをもつ。融通自在なゆたかな才能をもっていた…」＝カナダ人H・E・ドント。大正8年「山岳」2号

「(爺は)雨で逗留した日は決して日当を受けない。何もしないでご馳走になって日当をもらっては罰があたるって…」(喜作、高山善作、白峰の清水長吉ら多くの案内人の名を並べたあとで)就中、嘉門次が頭抜けて人間ができていたと思ふ」=日本山岳会の創立メンバーの小島烏水。

「(上高地から手軽な)焼や霞沢あたりに登った時は案内料をどうしても受けとらなかつた。礼心に酒をのませると、お返しにイワナを釣って持参した…」=山岳著作の多い日本山岳会初期メンバー辻村伊助。

嘉門次が行動と人柄で仙人のイメージを高めているのに対し、品右衛門は風ぼうと応接ぶりが登山者の心をとらえたようだ。

「笹の中から現われた品右衛門の姿は、自分に取って一種の驚きがあった。彼には何処となく清らかに洗いざらしたような所があった。体は小さくやせ、頭は半白で、眉も目も心持ちよいくらいに垂れ下り、薄いひげの生えたようすが、いかにも仙骨を帯びている」=学習院長を歴任した阿倍能成の「山中雑記」。

「慈愛に富む親がその子を膝下に寄せて話を聞かせるような心持がほの見える」道を失うた山中で、忽然として一人の老翁に会したようなものだ」=長谷川如是閑・河東碧梧桐著「針ノ木峠」。

もちろん私は、嘉門次や品右衛門を知らない。しかし、こうした感想を読むと、ある山人を思い出す。平成12年、94歳の天寿をまっとうした「乗鞍岳の主」福島清喜翁である。「わりあ(お前さん)…」と、おおらかに語りかける特異な話術の使い手だった。私も若いころから何かと世話になったが、一緒にいるだけで気分がほころんだ。鈴蘭小屋をはじめ肩ノ小屋、位ヶ原山荘開き、晩年は安曇村の村長にもなったが、冬の乗鞍岳を訓練の場にした初期の南極越冬隊員をはじめ著名な山男に“福島ファン”が大勢いた。独特の山男の雰囲気は漂わせていたからである。

「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し」と詠んだのは百瀬慎太郎だが、孤独で厳しい山暮らしを長期に続けると、いつの間にか人への情と徳を身につける傾向があるらしい。嘉門次然り、品右衛門もまた、といえそうである。「仙人」の誕生だ。その点喜作は、基本的に里を拠点にしていただけに、「仙人」になりきれなかったのではなか。しかし喜作には、愛犬との情があった。

狩猟は犬との共同作業といっている。例えば雪山でカモシカ見つけた猟犬は、吠えだてて追いまくる。カモシカは上へ上へ、尾根筋に逃げる習性がある。尾根の上で逃げ場を失ったり、深雪の場合は細い足が雪にもぐって追いつかれたりする。立ち往生しているカモシカを、後からやって来た猟師が「ズドーン」と銃で仕留める。猟犬のよしあしが猟の決め手になる。

喜作の猟犬は日本犬と外国犬の一代雑種といわれるが、語り継がれる名犬だった。ベス、アカ、メス、チンと名付けられた4匹は、喜作が雪山で寝る時、ベスは背中に、アカは腹に、メスは頭に、チンは足に、と寝る位置を定めて喜作を温めていたとか。実際、喜作が棒小屋沢で雪崩のため遭難死した時、生き残った2匹のうちベスはその日のうちに実家に帰り、異変を家族に訴え、アカは喜作の周りをはなれなかった。救助隊が5日後にかけつけた時、狂ったようなアカをなだめるのに苦労したそうだ。

忠犬ぶりが評判となり、ベス、アカは新しい飼主ひきとられた。ところが、東京にひきとられたベスはクサリを切って逃げた。本当かどうかわからないが、その後、殺生小屋周辺でベスに似た犬を見かけた、とも伝えられる。

嘉門次にも多い時には3匹の犬がいたという。大正2年、ウェストン夫妻を案内した際、雪渓をバックにとった記念写真に黒犬が写っている。時々、犬を連れて案内していたのだろうか。中でも「コゾー」と呼んでいた犬はよくしつけられていたようで、明神の嘉門次小屋と島々の実家を、首に「使いもの」を提げて単独で往復していたという。文盲の嘉門次は、息子の嘉代吉に明神へ来てもらいたい時、山へ矢印を書いた紙をもたせた。「コゾー」は片道2〜3時間、明神―島々を軽く日帰りして往復したそうだ。

品右衛門にも犬がいたことは考えられる。しかし記録には出てこない。孤独な仙人にとって、犬たちは、猟犬としてはもちろん、里の妻にかわる“山の伴侶”として欠かせない存在だったのである。(文中敬称略)

(きくち としろう/山岳ジャーナリスト)

展示構成

本展は「第1部 山人の源流」「第2部 嘉門次、品右衛門、喜作の登場」「第3部 系譜をたどる」の3部から展示を構成した。展示は以下のテーマで行なう。

第1部 山人の源流

1. 山の暮らし (1) 狩猟 (2) 漁労 (3) 採集
2. 山の集落 (1) 安曇村島々 (2) 野口村大出 (3) 西穂高村牧

第2部 嘉門次、品右衛門、喜作の登場

1. 上條嘉門次 (1) 嘉門次の肖像
(2) 伝 嘉門次使用・旧蔵の道具
(3) 嘉門次の関係史跡
2. 遠山品右衛門 (1) 品右衛門の肖像
(2) 伝 品右衛門使用・旧蔵の道具
(3) 品右衛門の関係史跡
3. 小林喜作 (1) 喜作の肖像
(2) 伝 喜作使用・旧蔵の道具
(3) 喜作の関係史跡

第3部 系譜をたどる

1. 島々周辺の山人 (1) 上條一族 (2) 嘉門次の弟子
2. 大出・大町周辺の山人 (1) 遠山一族 (2) 黒部の山賊 (3) 黒部最後の職漁者
3. 牧・有明周辺の山人 (1) 喜作の師匠 (2) 小林一族
4. 山案内人 (1) 大町の山案内人元祖
(2) 大町の初期山案内人① (3) 大町の初期山案内人②

北アルプス 山人たちの系譜

島々周辺の山人



「上條嘉門次」
上高地にて
明治45年(1912)7月下旬
波沢敬三撮影 (上條輝夫氏提供)



「上條嘉門次」
嘉門次小屋前にて
明治41年(1908)8月中旬
高野薫蔵撮影
(上條輝夫氏提供)



「上條嘉門次」
嘉門次小屋前にて
大正3年(1914)1月4日
八木道三撮影
(上條輝夫氏提供)



「上條嘉代吉(左端)」 蓮華温泉にて
大正元年(1912)8月下旬 (上條輝夫氏蔵)



「上條孫人(右端)」
(櫻井幸雄氏提供)



「大井庄吉」
(小林貞氏提供)



「内野常次郎」
大正池にて
昭和10~20年代頃
穂刈三寿雄撮影
(穂刈貞雄氏提供)

大出・大町周辺の山人



「遠山品右衛門」
平の小屋にて 明治44年(1911)8月29日撮影
(当館蔵)



「遠山品右衛門」
大正初期頃 (当館蔵)



「遠山品右衛門(左端)」 西正院にて
大正7年(1918)7月25日 伊藤孝一撮影 (百瀬堯氏提供)



「(左から)遠山富士弥、遠山林平、遠山兵三郎」
平の小屋前にて 大正末~昭和初期頃 (遠山茂雄氏提供)



「大西又吉(後列左から3人目)」
(百瀬堯氏提供)



「黒岩直吉(左から2人目)」
(黒岩俊夫氏提供)



「櫻井一雄(左)」と「平林高吉」
(櫻井幸雄氏提供)

牧・有明周辺の山人



「小林喜作」
槍ヶ岳山頂にて 大正5年(1916)
(小林貞氏提供)



「小林喜作(左)」
(小林貞氏提供)



「小林喜作」
(小林貞氏提供)



「小林一男(後列右端)」
(小林貞氏提供)

COLUMN ① 山人と初期の山案内人 一山の知恵の継承—

大町登山案内者組合(現大町登山案内人組合)は大正6年(1917)6月、大町で設立された^{※1}。設立時の組合員は22名^{※2}。当時の組合の性質は「山に通じた人間達の「隣りづきあい」といったもの」^{※3}であったという。

同組合設立時に中核となった加入者は、明治末期からの森林境界査定や測量登山に同行した経歴をもつ地元大町の猟師ら若干名であった。そのほかの加入者はおもに農業を営む大町在住者であり、中核となった猟師らに連れられて猟を手伝ったり測量登山で荷物を担いだりした経験を通じて山を知った人が大半だったと思われる。例えば、設立時からの加入者である黒岩直吉と松澤由蔵は、組合の中核のひとりであった猟師・伊藤菊十と親交があり、誘われて組合に参加したという^{※3}。また、設立直後に加入し昭和33年(1958)頃まで山案内を重ねた櫻井一雄は、猟師・伴五郎(本名長作か?)を祖父にもち、山に詳しい叔父の郡三郎から山を教わって山案内人になったという^{※4, 5, 6}。このように大町における初期の山案内人のなかには、山人と共に山を歩くことではじめて山を覚えたという人たちも少なくなかったと考えられる。

では一体、山人自身はどのようにして山を覚えたのであろうか。かつて山人が営らした山の集落には、何世代にもわたって綿々と蓄積されてきた狩猟や山仕事などに関する知識や技術が存在し、そうした「山の知恵」とも呼べる能力を各世代の山人たちも継承していたことはおおいに推察できる。(文中、敬称略)

(関 悟志/市立大町山岳博物館 学芸員)

※1 「大町登山案内者組合の設立」『山岳』第12年第1号(日本山岳会、1918)160-162頁

※2 「登山案内者(一)」『山岳』第13年第1号(日本山岳会、1918)100-105頁

※3 荒井今朝一著「大町口登山案内人抄録—その2—」『山と博物館』第20巻第1号(大町山岳博物館、1975)4頁

※4 百瀬慎太郎著「山岳夜話 案内人たちの横顔(下)」『新報新聞』(1947)「山を覚へば」(百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962)収録90-93頁

※5 瓜生卓海著「おおもち物語」(山と溪谷社、1976)172頁

※6 佐藤貴氏旧蔵資料(市立大町山岳博物館) 飯 No. 33

関係史跡等紹介

ここで紹介した写真および図表は撮影・提供者等を明示しているもの以外は全て当館撮影あるいは作成による。



2-1 槍・穂高連峰を望む

蝮ヶ岳ヒュッテ前より

嘉門次は幼少の頃から父・有馬又七に連れられて徳本峠周辺へ猟に出掛けたと伝わり、12~13才頃に槍沢ではじめてカモシカを仕留めたという。一方、明治18年(1885)夏、37才のときに農商務省技師・坂市太郎の槍ヶ岳~鷲羽岳~美師匠縦走を案内したのが記録に残る最初の登山案内である。それ以前にも明治10年にイギリス人冶金学者ウィリアム・ガウランドらを槍ヶ岳に案内したのではないかとされるが明確な記録などは明らかではない。



2-2 嘉門次小屋 明神池畔(上高地)

嘉門次は安政5年(1858)夏、10才のときに父・有馬又七に連れられて上高地に入り、樫の見習いとして過ごして以後、毎年、樫仕事のために季節的に上高地滞在するようになった。イワナ釣りを覚えたのもこの頃という。その後、元治元年(1864)夏、16才で松本藩の藩有林見廻役の助手になった。

明治13年(1880)、嘉門次は明神池(当時は宮川池あるいは宮川ノ池)畔に小屋を持つ。小屋といっても樹皮と枝木などで建てた狩猟用の仮小屋で、もとあった樫小屋を修復した程度のものである。この小屋(当時は宮川あるいは明神の小屋)は後に嘉門次小屋と呼ばれ、ときに登山者も宿泊した。

現在、嘉門次小屋はイワナの塩焼きなどを味わえる休憩所兼売店として上高地来訪者に親しまれている。



2-3 嘉門次碑 明神池畔(上高地)

昭和33年(1958)に嘉門次小屋前に建立された嘉門次のレリーフを埋め込んだ石碑。レリーフは彫刻家・上條俊介制作によるもの。



2-4 播隆窟内の播隆石像

槍沢 (黒野こうき氏撮影・提供)

槍沢上部にある岩窟は江戸後期の念仏行者・播隆の修行場跡として知られ、播隆窟(坊主の岩屋)と呼ばれる。その入口には播隆の徳をたたえて明治30年代頃に安置された石像があるが、この石像は嘉門次が背負い上げたものと伝えられている。



2-5 平(だいら) 黒部溪谷

品右衛門は一説には慶応2年(1866)頃、14か15歳頃から黒部溪谷に入るようになったという。おそらく杣や猟など山仕事のため、父・遠山新三郎(別名・長左衛門か?)に連れられてのことだったと思われる。明治8年(1875)頃、品右衛門(23か24才頃)は黒部川平(だいら・江戸時代頃は中ノ瀬平と称されていた)の右岸側に仮小屋(平の小屋)を建て、そこを拠点に夏はイワナ釣りを行なうようになる。明治40年頃までには、平の小屋のほかにも黒部川上流の東沢出合と下流の御山谷出合にも仮小屋を持ち、山林局から盗伐の監視役を依頼されていたともいわれる。明治初期には、品右衛門が建てた小屋のほか、黒部川平には左岸側に越中の人々が管理する小屋もあり、平周辺にはいくつか小屋があったようである。現在、平の渡し場ではダム湖の誕生で兩岸を連絡する渡し船によって渡る。



2-6 平の小屋 大正2年(1913) (百瀬堯氏提供)

大正2年(1913)7月27日~8月4日、大町の案内人・伊藤菊十、勝野玉作、傳刀林蔵の案内によって、對山館主人・百瀬悳太郎、大町中学校教師・秦四郎、口シア人商人・アレキサンドル・グーセフ、萩御常太郎は大町から針ノ木峠~蓮華岳往復~新越乗越~扇沢~爺ヶ岳~鹿島槍ヶ岳~五體岳まで縦走(グーセフと萩御は鹿島槍ヶ岳まで)した。途中、一行は平で宿泊している。宿泊したのは黒部川右岸にあった品右衛門が建てた小屋であろうか。

2-7 平の渡し 大正期頃 (百瀬堯氏提供)

架線に滑車と板による渡しの頃。

平に吊橋が架設されるまで、黒部川を渡るため、この場所に架設された各種施設は厳しい気候条件の中で、幾度も架け替えや補修が必要だった。明治から大正初



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12

期頃には品右衛門が架線による渡しを補修し、1人10銭の渡し賃を取っていたという。

平の渡しの変遷は次の通りである。

- 明治11年(1878) 信越連絡新道開削にともない別橋架設(明治13年まで)
 - 明治26年(1893) ウォルター・ウェストン、渡渉(と推定)
 - 明治39年(1906) 志村烏丸、綱に籠のついた籠渡しを使用
 - 明治42年(1909) 安侶純成、鉄線にプランコ状の板を滑車で通した渡しを使用。舟嶺の後途絶えていた施設を測量技師が再架設したという
 - 大正5年(1916) この年、「大町の対山館で造った籠の渡しがかきてみた」(板倉勝宣)。針金に滑車が通り3尺四方の板がついていたという
 - 大正7年(1918) 「黒部川の籠渡しに六月中に信野(マ)鉄道の後援で修理」(百瀬慎太郎)された。伊藤幸一、滑車に籠のついた渡しを撮影
 - 大正12年(1923) 3月、伊藤、百瀬、赤沼千尋ら、プランコ状の渡しを利用。映像に収める
 - 大正15年(1926) 電源開発にともない日本電力が吊橋架設。その後数年間は鉄線渡しも並存
 - 昭和36年(1961) 黒部ダム建設工事により吊橋水没
- ※〈市立大町山岳博物館編「対山館と百瀬慎太郎 一岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る」(市立大町山岳博物館、2002)一部抜粋・加筆〉

2-8 平の渡し 大正末期～昭和初期頃 (百瀬堯氏提供)

吊橋と架線並存の頃。大正15年(1926)以降。

2-9 平の渡し 昭和31年(1956)7月 (百瀬堯氏提供)

吊橋の頃。

2-10 品右衛門の自宅 大出(大町市平)

品右衛門の暮らした自宅が大出(おおいで)に現存する。家伝では、この地に祖先が住みはじめからの約250年間に火事で代々の母屋は何度も焼け落ち、現在の建物で明治期以降だけで四代目になるという。現存の建物は近年になって屋根をトタン置きにするなどの補修・改修が加えられているが、品右衛門が梁などの材木を山から切り出して建てたものという。

2-11 西正院(大姥堂) 大出(大町市平)

西正院は本尊に木造大姥尊坐像を安置することから大姥堂(おおばどう)とも呼ばれる。もとは品右衛門の生家がこの堂の鍵を預かり管理に当たっていたという。現在は大町市平野口地区内から選出された「西正院大姥堂世話人会」が管理し、毎年6月の大祭などを行っており、本尊は7年に1度の御開帳以外は秘仏となっている。

この本尊は室町中期の造像と推定され、伝承では天正12年(1584)に富山城主・佐々成政が「さらさら越え」の折に奉持したとされる。

2-12 野口村大出 大正7年(1918)7月25日

伊藤幸一撮影 (百瀬堯氏提供)

茅葺の建物は西正院。画面手前に延びるのは龍川谷への道筋。

一説には江戸時代、立山信仰の信者が裏参道の入口にあたるこの場所に立山よりこの像を請来したとも考えられるという。明治末期から大正初期ごろの一時期、遊行の僧が住んだこともあったようだが、これまで無住の堂である。



2-13 モミ沢 高瀬渓谷

(写真は湯俣川ついでた岩付近より上流を望む)

高瀬渓谷の奥、湯俣川支流のモミ沢に現在生息しているイワナは、かつて品右衛門が別の場所で獲ったイワナを運んできて放流した子孫ともいわれる。

高瀬川の湯俣水俣出合付近から上流、湯俣川と水俣川の水質は一般的に魚類が生息するのに適さないため、両河川の本流には魚の姿は見えない。しかし、湯俣水俣出合付近から距離を隔てた上流のモミ沢にイワナが生息しているのだが、その理由は明らかではない。



2-14 喜作新道を望む 東天井岳～横通岳の登山道より

大正9年(1920)秋、喜作は中房温泉経営者・百瀬猪三松、百瀬彦一郎(信濃山岳会会員)親子の協力のもと、喜作の長男・一男や牧、有明の住人20名前後も携わり、東天井岳から西岳をへて東鎌尾根から槍ヶ岳へいたる登山道(後に喜作新道と呼ばれる)の開削工事を一応完了させた(本格的な完成は翌年の大正10年)。

この新道は、もとあった猟師が通った獣道程度の道筋を拡幅・整備したものであった。大正10年秋、喜作は牧の木工・寺島文治らとともに、春からの突貫工事により殺生小屋(現殺生ヒュッテ)を新道の終点付近にあたる槍ヶ岳直下に建設。翌11年6月になって小屋を開業した。それまで槍ヶ岳へは中房温泉から燕岳～東天井岳～東天井岳～横通岳～常念岳へと縦走し、一ノ俣谷を下って槍ヶ岳を登り直して頂上にいる4日の行程が普通だった。それがこの新道の完成によって距離がおよそ半分に短縮し、中房温泉から燕岳をへて槍ヶ岳まで1日の行程でたどり着けるようになり、数年後には槍ヶ岳への主要縦走ルートとして登山者に知れわたり、殺生小屋は登山者向けの営業小屋として一時の隆盛を見せたのであった。



2-15 殺生小屋

大正10～11年(1921～1922)頃 (小林貢氏提供)
完成当時の様子。



2-16 喜作の旧宅 牧(安曇野市穂高)

喜作は明治30年(1897)、22才のときに生家から独立し、独力で自宅を建てたという。牧には喜作の建てたと伝わる旧宅の一部が現存し、物置として利用されている。現在は平屋のトタン屋根・壁になっているが、もとは2階建てで瓦屋根の塗壁だった。また、かつて庭先には喜作が植えたハイマツがあったというが今はない。



2-17 栗尾山満願寺 牧(安曇野市穂高)

古代の終わりから中世頃の開山という浅川山山麓にある古刹。喜作はこの寺の門前に位置する山崎という集落に生まれた。



2-18 棒小屋沢を望む 爺ヶ岳南峰より

大正12年(1923)3月、喜作と長男・一男は、嘉門次の弟子である上高地の猟師・大井庄吉、平村源汲の猟師・荒井矢蔵とともに北アルプス北部へ出猟中、爺ヶ岳北西に位置する棒小屋沢のクラウラ沢出合付近にあった野陣場小屋(狩猟用の仮小屋)で同宿した源汲の猟師・樺市千馬吉、杉浦猪之助、大出の猟師・平沢美津男の一行を含めた計7名と双方の猟犬計10頭とともに雪崩によって遭難。結果、喜作と一男が死亡した。2人の遺体は菟川の堂林署小屋から西正院西側に搬出され、大町警察署の検視を受けた。死因は窒息死であった。

2-19 喜作・一男遺体搬出隊 大正12年(1923)3月19日

(小林貢氏提供)

喜作と一男の遺体の検死終了後、西正院前で遺体搬出隊全員を集めての記念撮影が行なわれた。

2-20 喜作レリーフ 切通岩(大天井岳付近)

昭和33年(1958)に大天井岳北方、東天井岳方面と西岳方面への分岐付近にある切通岩と呼ばれる岩壁に設置された喜作のレリーフ。このレリーフは彫刻家・小川大系制作によるもの。昭和46年(1971)10月、『喜作新道』著者である作家・山本茂実らが参加してレリーフ前で第1回喜作祭が開催された。以後、喜作祭は毎年行なわれている。

COLUMN ② 山人たちの登山の知恵と力 —小林喜作 最後の猟の足跡から—

小林喜作は、2月に大町から鹿島川沿いに入山、猟を続けながらカクネ里出合を経てシラタケ沢を遡り、現在の五竜山荘付近に出た。主稜線をたどり五龍岳山頂から黒部谷へ伸びる東谷山尾根を下って東谷へ降りた。東谷からは、おそらく鹿島ウラ沢へ入り、牛首尾根を越えて棒小屋沢へ入った。そこで小屋掛けをして猟をしたと考えられる。詳しいルートは、不明であるが、私も5月に喜作のルートをたどってみた。大川沢は、夏はシラタケ沢出合の近くに狭いゴルジュがあり、数回渡渉しなければならないし、高巻きもあり難儀する。しかし、積雪期、谷は雪で埋まり歩きやすい。シラタケ沢とカクネ里出合には滝があるが積雪期は埋まる。大川沢、シラタケ沢の遡行に技術的に困難な問題はない。ただし、雪崩は、谷に収斂(しゅうれん)するので、雪崩をどうやって避けるか、その知恵を身につけていたに違いない。

五竜山荘から山頂までは、寒気と強風にさらされ、凍てついた稜線を登らなければならない。ピッケル、アイゼンのない時代、滑落しないためには技術的に極めて高度な歩行能力が必要である。当時の防寒、防風衣、保温衣、手袋、靴は、現在の登山用衣類から見れば、決して優れているとはいえない。初期の南極探検隊などは、ウールの衣類を着用している。このウールが過酷な寒冷環境で生命を支えた。しかし、庶民にウールの着物は無い。カモシカの手袋と靴、当時の野良着である単衣の着物、ももひきに、防寒着としてカモシカの半纏(はんてん)、濡れて風にも吹かれれば簡単に凍死する。荒天の恐ろしさを身にみている。極めて用心深く対処したに違いない。

おそらく、風の弱いシラタケ沢側の雪洞で待機し、1週間に一度くらい訪れる好天を見定めて、すばやく東谷へ入っただろう。優れた、天候の判断と驚異的な歩行能力がそれを可能にしたのであろう。東谷から鹿島ウラ沢、牛首尾根、棒小屋沢、谷の中とは言え、冬の季節風が吹き荒れる稜の風上側である。稜線近くはその影響が強い。下方の黒部川に近い領域で小屋掛けをして、十分な焚き火で暖をとり、用心深く、雪崩や荒天を避け、猟をしたと考えられる。

雪崩遭難の多くは降雪中と降雪直後に発生している。喜作はそれを知っていて降雪中は行動を控え、積雪状況と地形を注意深く観察し、経験と勘で雪崩を避けただろう。だが、皮肉にも、雪崩を避けた小屋で夜間に雪崩にやられた。予想をはるかに超えた大規模なほう雪崩であったろう。

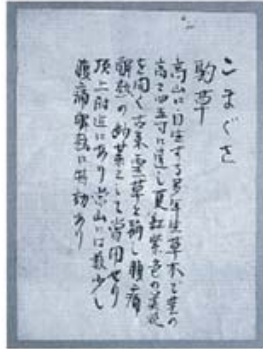
(柳澤 昭夫/市立大町山岳博物館 館長)

展示資料図版

ここに挙げた資料は主な展示資料の一部である。また、写真は全て当館撮影による。



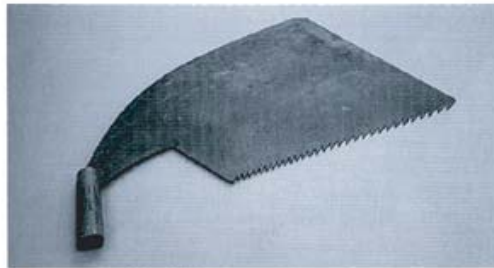
1-7 乾燥植物 オウレン
個人蔵 《参考展示》



1-8 葉草の説明書き「こまぐさ」
個人蔵 《参考展示》



1-9 マサカリ
松本市安曇資料館蔵



1-10 ノコギリ(木挽鋸・こびきのこ)
松本市安曇資料館蔵



1-11 写真「シユラによる木材の搬出」複製
松本市安曇資料館蔵(奥原貞夫氏提供)



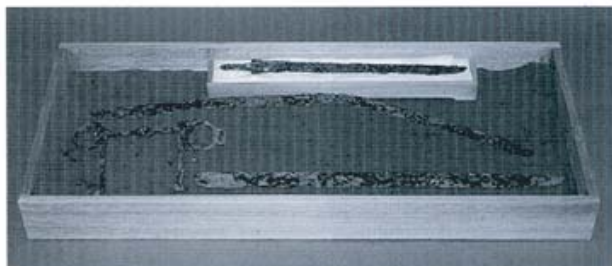
1-12 写真「大野田の土場」複製
松本市安曇資料館蔵(加藤茂氏提供)



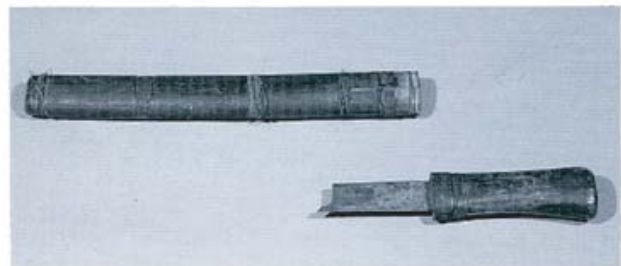
1-13 西丸様御用の入山札(御鑑札)
大町市有形文化財 個人蔵・当館保管



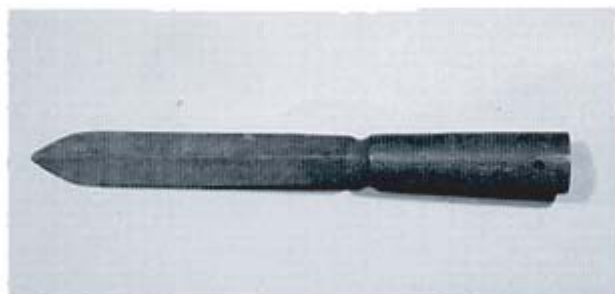
1-14 飯嶋家文書「高瀬入深谷鳥瞰全図(支流谷々詳細記入)」
大町市有形文化財 個人蔵・大町市文化財センター保管



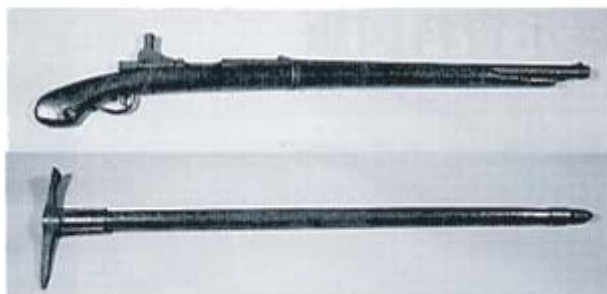
1-15 穂高牧 浜場塚(13号)古墳出土品
平成3年(1991) 穂高町教育委員会発掘 安曇野市穂高郷土資料館蔵



2-1 伝 嘉門次使用 山刀(やまがたな) 個人蔵



2-2 伝 嘉門次使用 熊槍(部分) 個人蔵



2-3 伝 嘉門次使用 鉄砲(銃銃)【上】 個人蔵
2-7 伝 嘉門次旧蔵 ウォルター・ウェストン贈 ビッケル【下】 個人蔵



2-4 伝 嘉門次使用 鳥口(からすくち)【下右】 個人蔵
2-5 伝 嘉門次使用 火薬入(かやくいれ)【下左】 個人蔵
2-6 伝 嘉門次使用 鉛溶器(錆鍋・いなべ)【上】 個人蔵



2-8 伝 嘉門次旧蔵 ウォルター・ウェストン贈 写真帳 個人蔵



2-9 對山館宿帳(写真・コピー複製、部分) 個人蔵 (参考展示)



2-10 伝 品右衛門使用 釣竿【左】 当館蔵
2-11 伝 品右衛門使用 皮鉢(かわばち)【右】 当館蔵



2-12 伝 品右衛門使用 備掛(かたかけ) 当館蔵



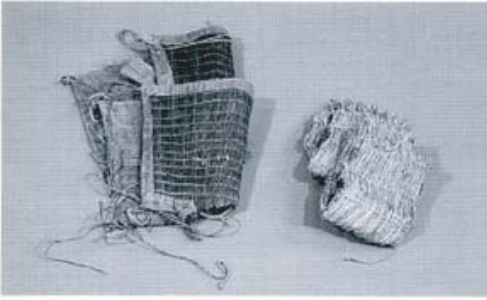
2-13 伝 品右衛門使用 火打金(ひうちがね)付き 火口入(ほくちいれ)【下】 当館蔵
2-14 伝 品右衛門使用 火打袋(ひうちぶくろ)【上】 当館蔵



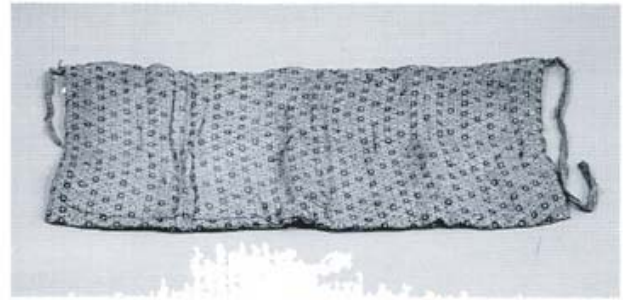
2-15 火起こしの道具類 当館蔵 (参考展示)



2-16 伝 品右衛門使用 襦袢(じゅばん・ジバン) 【上】 当館蔵
2-17 伝 品右衛門使用 シブヨッコギ(渋よっこぎ) 【下】 当館蔵



2-18 伝 品右衛門使用 脛巾(はばき)【左】 当館蔵
 2-19 伝 品右衛門使用 アッケボウシ(踵帽子・踵掛)【右】 当館蔵



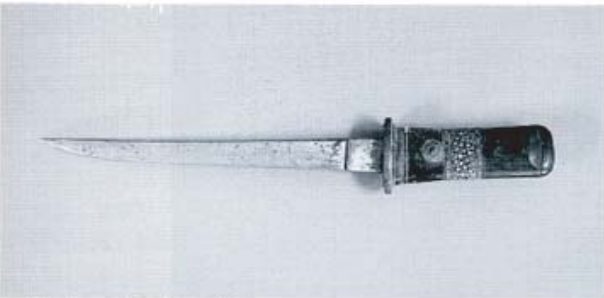
2-20 腰布団(こしぶとん) 当館蔵 《参考展示》



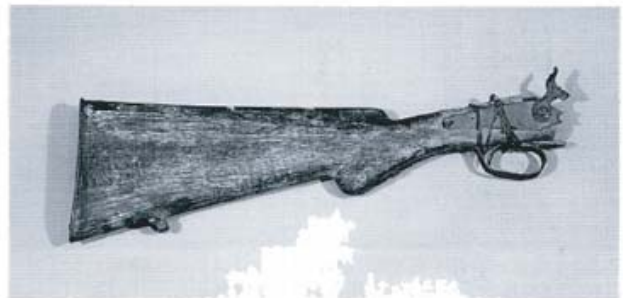
2-21 伝 品右衛門使用 シルデンコ(汁でんこ)【左】 当館蔵
 2-22 伝 品右衛門使用 横面桶(よこめんづ)【右】 当館蔵



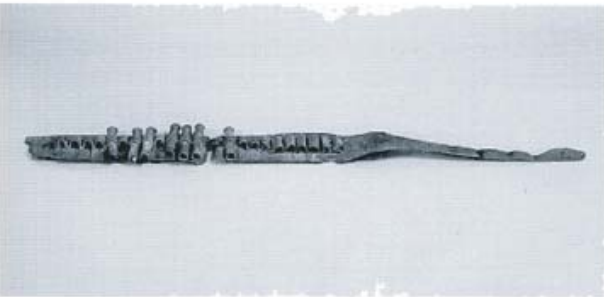
2-23 伝 品右衛門使用 帽子 当館蔵



2-24 伝 喜作使用 狩猟刀
 安曇野市穂高郷土資料館蔵



2-25 伝 喜作使用 鉄砲(猟銃・部分) 当館蔵



2-26 伝 喜作使用 弾帯 安曇野市穂高郷土資料館蔵



2-27 伝 喜作使用 鉄砲の道具類 安曇野市穂高郷土資料館蔵



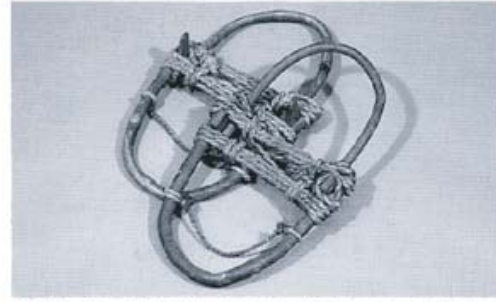
2-28 伝 喜作使用 蕨口(とびくち)(部分) 当館蔵



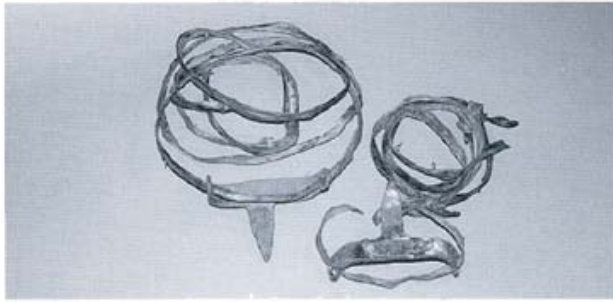
2-29 伝 喜作使用 背負袋 当館蔵



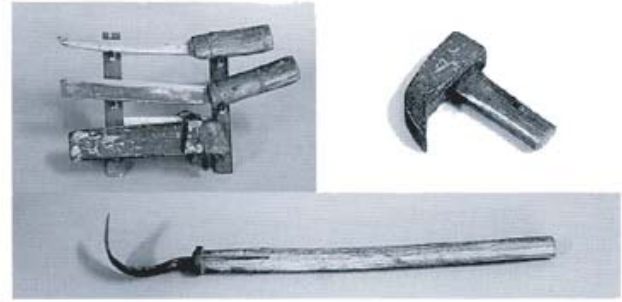
2-30 伝 喜作使用 足皮(あしかわ) 当館蔵



2-31 伝 喜作使用 輪標(わかんじぎ) 当館蔵



2-32 伝 喜作使用 鉄標(かなかんじぎ) 安曇野市穂高郷土資料館蔵



2-33 伝 喜作使用 新道開削・山小屋作りの道具類 安曇野市穂高郷土資料館蔵



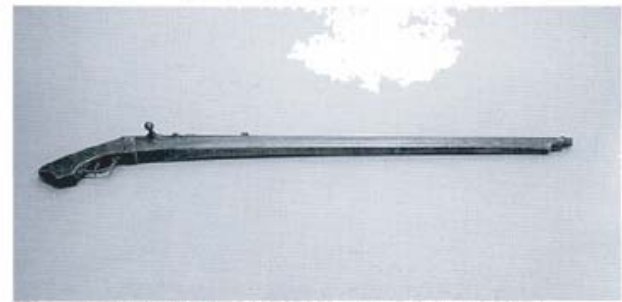
2-34 常念坊乗越小屋宿帳「胸中のアルプス」 (写真複製・部分) 個人蔵 《参考展示》



2-35 殺生小屋物品調(大正十二年七月五日調) 個人蔵



2-36 喜作・一男 葬儀の弔辞 個人蔵



3-1 内野常次郎使用 鉄砲(猟銃) 松本市安曇資料館蔵



3-16 小林一男使用 手帳 個人蔵



3-18 大町登山案内者組合の印章【左】 個人蔵
3-19 大町登山案内者組合の記章【右】 個人蔵

展示資料目録・資料解説

ここに挙げた資料は主な展示資料である。

1-1 ニホンカモシカ剥製標本 オス 当館蔵

狩猟で捕らえたカモシカは肉や内臓を食用にしたほか、毛皮は敷物や衣類に角は生薬などに利用されたため、現金収入源にもなった。

1-2 ツキノワグマ剥製標本 メス 当館蔵

狩猟で捕らえたクマは肉や内臓を食用にしたほか、毛皮は敷物や衣類などに一部の内臓は生薬に利用されるため、現金収入源にもなった。

1-3 ライチョウ剥製標本 オス 当館蔵

ライチョウは一部の山では霊鳥として崇められた一方、猟師などに捕らえられて食用にされた。明治末期から大正初期頃には学校教材用の剥製標本として取り引きされたため、現金収入源にもなった

1-4 イワナ剥製標本 当館蔵

明治初期から昭和30年代頃、黒部・高瀬川や梓川の渓流などで捕らえたイワナは生身のまま、あるいは身を薫製状に加工(内臓は塩辛に加工し、焼く際に身から出た油分は中耳炎の薬にもしたという)すると旅館などが塩焼や甘露煮用などに買い取ったため、現金収入源にもなった。

1-5 岩石・鉱物標本 硫黄鉱物は北陽建設株式会社蔵 そのほかは当館蔵

水晶岳などで採集された水晶やザクロ石は装飾品などに、大黒岳西の蔵鬼谷上流右岸にあった大黒鉱山で産出した銅鉱石は精錬されて銅製品に加工し利用された。硫黄岳周辺などで産出した硫黄鉱物は、江戸時代には火薬や付木(つけぎ)などの原料あるいは生薬などに利用された。霰石(あられいし)あるいは霰砂などと呼ばれ、江戸時代から湯俣地獄に産出する名物として知られた球状石灰石(炭酸カルシウムを主成分に形成された球形の小石)は縁起物や盆栽の敷砂などとして珍重された

1-6 コマクサ 複製・パンフラワー作品 当館蔵

昭和30年代頃まで、コマクサは“雪草”として木曾の御嶽山を中心とした御嶽信仰には欠かせない植物であった。明治43年(1910)の記録によるとコマクサは当時、30匁(112.5g)で約1円という相場取引され、木曾地方だけで年間約2,000円の売上に達したとあり、1年で約225kgのコマクサが販売されていたことになる。当時、コマクサは御嶽山ではほぼ採り尽くされ、乗鞍岳、ハケ岳、有明山、燕岳、蓮華岳、白馬岳などで採取されたものが買い取られて木曾地方へ運ばれていたようで、コマクサ採りは山麓に住む人びとの現金収入源にもなった

1-7 乾燥植物 オウレン 個人蔵 《参考展示》

御嶽山の登山口、木曾郡王滝村で代々続く薬草店において昭和30年代ごろ生薬として販売されていたもの

1-8 薬草の説明書き「こまぐさ」 個人蔵 《参考展示》

この薬草店では昭和30年代まで、乾燥したコマクサの全草を単品で店頭販売していた。これは販売用の陳列棚に添えられていたもの店頭にはガラス板製の蓋付き木製小箱を傾斜台に6つ並べた陳列棚があり、小箱にはカイビヤクソウ(イワツメクサ)、オンタケニンジン(シシウド)、オニク、コマクサなどが収められていた。ただ、コマクサについては御嶽教の一般信者など誰もが買い求めることができたわけではなく、信者一行を案内する先達が購入して各信者に施していたものと思われる。

COLUMN ③ ニホンカモシカ ー狩猟と保護ー

ニホンカモシカ(ウシ科)と人との関わりは長い。縄文前期～弥生時代の遺跡からカモシカの骨(加工された道具もある)が出土しているほか、「日本書紀」などにカモシカは「かましし」「しし」などと記されている。また、地方により様々な呼び名があることから、ふるくから狩猟の対象であったと考えられている。山村では、カモシカの肉や内臓は食用とされ貴重な蛋白源であり、毛皮は敷物、尻当てのほか防寒具や小物入れ、リュックサックに利用され、角はカツオ釣りの疑似餌、漢方薬としての利用と捨てるところがなく、現金収入源にもなっていた。

カモシカは、昭和9年(1934)に旧「史蹟名勝天然記念物保存法」により天然記念物に種指定されたが、個体数が減りつづけ、昭和30年には「文化財保護法」により特別天然記念物に指定された。カモシカの密猟は、昭和34年に実施された密猟の全国一斉摘発まで続いていた。

狩猟動物から保護動物となったが、全国的な拡大造林に伴う餌供給の増大などにより、個体数、分布の拡大が起こり、昭和40年代後半になると、カモシカによる農作物や植林幼樹木の食害が目立ちはじめた。食害は拡大傾向にあり防護柵の設置などで防ぐ努力をしたが、被害は減少しなかった。特に被害の激しい地域では、昭和53年より麻酔銃による捕獲が許可され、食害防除のための個体数調整が実施されるようになり現在も実施されている。これは天然記念物としては異例のことである。

さらに、近年ではホンシュウジカ(シカ科)の個体数も増加しており、カモシカとの生息域が一部重複するなど、今後の生息動態が注目されている。

(清水 博文/市立大町山岳博物館 学芸員)

参考文献：大町山岳博物館(編)1991. カモシカ氷河期を生きた動物. 信濃毎日新聞社.

1-9 マサカリ 松本市安曇資料館蔵

上高地周辺における杣仕事で使われた道具。マサカリの一種で、厚木を角材にするときなどにはなくてはならないものであった。江戸時代、上高地(当時はカミクチあるいは上口)周辺を含む北アルプス東面一帯の山々は松本藩が領有していた。これら地域が抱えるもつ森林資源は豊富で、天与の財産とも呼べる宝であった。藩では藩有林から得られる森林資源を財政に組み込むため、伐採事業を計画し、「入四か村(いりよんかそん・梓川上流域の深谷に沿ったかつての大野田村、嶋々村、稲核村、大野川村の4村を総称した呼び名)」の村人を伐採の仕事に従事させた。入四か村の人々は、江戸時代以前から上高地周辺の山々に自由に入り、山から木材を切り出すなどして生活を営む杣として暮らしてきた。当時からが生活圏としていた上高地はまさに杣たちの別天地であった。

1-10 ノコギリ(木挽鋸・こびきのこ) 松本市安曇資料館蔵

上高地周辺における杣仕事で使われた道具。厚木から角材や板をとるために利用されたもの。江戸時代、上高地・乗鞍岳一帯や霞沢・大白川・水殿川・島々谷などの山林を中心にした松本藩有林での伐採作業には、年代や季節的な変動が常であったが、江戸後期頃には300人を超える杣があたっていたという。

1-11 写真「シュラによる木材の搬出」複製 松本市安曇資料館蔵(奥原貞夫氏提供)

明治末期の島々谷におけるシュラ(修羅・山腹の傾斜を利用した木材搬出用の滑走路)による木材搬出風景。江戸時代にも同様の「シュラ出し」によって上高地周辺で伐採した木材を搬出した。写真は、滑走路断面が円弧状になるように丸太を組んだ「木シュラ」によって搬出している様子である。松本市安曇島々から島々谷をさかのぼり、二俣から南沢に入って岩魚留を通過し、峠を上り徳本峠を経て梓川と白沢の合流点である白沢の合(現在の明神付近)に下る道は、江戸時代、上高地周辺で木材の伐採作業に従事する杣たちが利用した重要な道筋であった。

1-12 写真「大野田の土場」複製 松本市安曇資料館蔵(加藤茂氏提供)

大正～昭和初期の木材の陸揚げ・集積場所の風景。上高地周辺で伐採された木材は梓川の流れて利用して搬出され、土場(貯木場)で陸上に引き揚げられて集積された。杣仕事は重労働かつ危険を伴うものであった。なかでも伐採・搬出・集積した材木を川から流す「川下げ」は特に危険な作業だった。危険がつきまとった杣仕事では、ケガを負うものやときには命を落とす者もいた。現在、上高地周辺には八右衛門沢、善六沢、奥又白沢、長堀沢など人名に由来すると思われる地名が複数あり、それらはかつて杣仕事によって命を落とした者の名前がつけられた場所だともいわれている。

1-13 西丸様御用の入山札(御鑑札) 大町市有形文化財 個人蔵・当館保管

江戸後期、江戸城西丸(西丸様)再建のために幕府から木材搬出の命令を受けた加賀藩が雇った杣たちが携行した入山札(御鑑札)。木製の札の片面には「人足きん」と記され、右上端には角で囲まれた「松本」の文字の焼印が押されている。もう片面には「信濃安曇郡ノ野口村ノ庄屋ノ善右衛門」と記されている。札の上部には穴がけられて紐が結ばれており、同様の木札が8枚1組と10枚1組とに束ねられている。天保9年(1838)に江戸城西丸が火災で消失した際、加賀藩はその復旧に必要な御用材搬出の幕命を受けた。しかし、黒部深谷周辺の山々に自生するネズコ(ヒノキ科の常緑高木)などの良材を伐採・搬出するにあたり、実際に作業にあたる杣やかれらの食料などを加賀藩内で確保することは、その自然条件から困難であった。そこで加賀藩は松本藩内から野口村の杣たちを雇い、同村の庄屋・飯島善右衛門がその差配を行なった。当時、加賀藩の御嶽山として入山が取り締まられていた黒部深谷一帯での木材伐採・搬出作業に雇われた杣たちが、入山許可証として携行したのがこの入山札である。野口村は信濃・越中両国境に接し、松本・加賀両藩領界に位置し、村の西奥には広大な山岳地帯(現在の北アルプス)をかかえる日本有数の山の村であった。また、地理的特徴のひとつである川についていえば、高瀬・竜(加賀)・鹿島(鹿嶋)川の3河川合流の地点である。野口村内西方に位置する集落の大出は、野口村の枝村であった。大出という地名は、一般的に伏流水が湧き出る場所をさすことが多く、野口村の大出も先述の3河川によって形勢された扇状地上に位置することで湧水がある場所として名付けられたものと思われる。寛永17年(1640)、加賀藩主・前田利常が浦山村の農民・伝右衛門に山中警備の内役を任命したことによって実質的にはじめられた加賀藩による「山廻り役(奥山廻役)」制度。その後、明治3年(1870)の同制度廃止まで200余年にわたって、この山岳地帯は「御嶽山」

COLUMN ④ ツキノワグマ 一人との共存をめざして

ツキノワグマ(クマ科)は全国的に生息個体数の減少が懸念されている大型の哺乳動物である。九州では絶滅し、四国では絶滅のおそれが非常に高いと考えられている。本州でも生息域が分断化されるなどにより、地域個体群の孤立や劣化が進み、環境省版レッドデータリストでは、6つの地域が「絶滅のおそれのある地域個体群」に挙げられている。このほか国際自然保護連合(IUCN)においても危急種とされ、ワシントン条約で国際取引の規制もされている。

長野県では平成7年(1995)より「ツキノワグマ保護管理計画」(県独自事業)を実施してきたが、平成14年からは「特定鳥獣保護管理計画」に移行している。県内におけるクマの年間捕獲数は、昭和40年(1965)頃までは100頭前後が普通であったが、以降は捕獲数が増加し、400頭を超えた年もあった。地域個体群の保護を考え、平成7年より年間の捕獲上限数は狩猟と個体数調整(有害駆除)と併せて150頭とされたが、この数値を超える年もみられている。平成18年(2006)は人里に現れたクマが著しく多く、12月19日現在で693頭(そのうち144頭は放獣)が捕獲された(長野県発表)。

近年は人家周辺へのクマの出没による人身被害も増加傾向にあり、適切な生ゴミ処理などクマを呼び寄せないような環境づくりや自己防衛意識の啓発、本来の主要生息域である標高1,000~2,000m前後の山地では、クマの生息に適した環境整備を行うといった捕獲以外の防除も推進されている。また、生体捕獲されたクマに電波発信機をつけ行動範囲を調べたり、唐辛子スプレーを吹きつけたりして再び人里に現れないように学習させて山奥に放獣する方法や、イヌによる追い立てなども実践されている。

このように、いかに人との共存を図るべきかの方法が模索されている。(清水 博文/市立大町山岳博物館 学芸員)

参考文献:長野県林務部2002. 特定鳥獣保護管理計画(ツキノワグマ)。長野県。環境省自然保護局野生生物課(編)2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-1哺乳類。(財)自然環境研究センター。

として一般人の入山・越境は厳禁されていたが、信濃国から越中国へ通じる抜け道(立山詣での異参道、漁獵・伐木の道)として、一筋の徒歩(かち)道が通じていたのだ。その野口村において飯嶋家は江戸末期から明治初めまで、三代にわたり野口村庄屋を務めた家柄であった。明治初め、この道筋を牛馬の通行できる道路に改修し、信州内陸部と北陸沿海部をつなぐ貨客交流の最短路にしようという事業が長野・石川両県有志の結社「開通社」によって一度は実現した。開通社の頭取として信州側の先頭に立ったのが庄屋役三代目の飯嶋善造であった。明治10年代、飯嶋家は新道の通行人向けに旅宿もやったように「丑(かねじょう・家印) 御宿 越中新道頭取 飯嶋善造」という看板も残る。飯嶋家に残る信越連帯新道の関係史料などは、平成15年(2003)に大町市有形文化財に指定されている。

1-14 飯嶋家文書「高瀬入沢谷鳥瞰全図(支流谷々詳細記入)」 大町市有形文化財 個人蔵・大町市文化財センター保管

明治5年(1872)、西澤源重郎によって描かれた高瀬沢谷の絵図
画面右下には「明治五壬申年/三月十日忍(認か?)之 西澤源重郎」と記され、右上隅には山之神の神社印が押されている。江戸時代から明治初期、通称として野口山と呼ばれた高瀬入(「入(いり)」とは河川の奥、すなわち上流部のこと)および麓(加賀)川入の山々は松本藩の藩管山(御山内)として、藩御用達の御用木が伐採・搬出された。広大な藩有林を抱える藩管山であった野口山の実際の管理は野口村に任せられ、村内には「山本締・山廻り役」など藩から任命された役職が置かれた。山本締役は藩の委託を受けた総括責任者といえる役職であったようである。文政3年(1820)の文書には「山本メ 源十郎」とあり、時代的に隔たりはあるが、この絵図を描いた西澤源重郎と同一人物とも推測されるがはっきりとはしていない。

1-15 穂高牧 浜塚塚(13号)古墳出土品 平成3年(1991) 穂高町教育委員会発掘 安曇野市穂高郷土資料館蔵

約1300年前の古墳から出土した鉄製の鐙(くつわ・馬具の一種)と大刀3本
馬具の一種である鐙は、手綱をつけるために馬の口に含ませる金具。一方、この大刀は装飾用の直刀である。いずれも、この古墳の被葬者の権力と地位を象徴する品として副葬されたものと思われる。
安曇野市穂高牧は、烏川扇状地の扇頂に位置し、北アルプス東面の山麓に沿った周辺地域からは縄文時代の遺跡が多数確認されている。また、古代には、朝廷直轄の牧場「猪鹿(いが)の牧」が成立し、付近には数多くの古墳も存在している。このことが牧という地名の由来といわれている。さらに、古代の終わりから中世に開かれたといわれる栗尾山満願寺が浅川山山麓にある。このように牧の歴史は穂高地域で最も古く、歴史的にも重要な地域である。

2-1 伝 嘉門次使用 山刀(やまがたな) 個人蔵

狩猟に使われた小型の鉈。クマやカモシカ猟には欠くことのできない道具で、護身のためにも常に身に付けていた愛用の品という
刀身は柄に近い根本付近で折れ、その先のほとんどの部分が欠損。木製の鞘付き。嘉門次はこの山刀のほかに普段の山仕事用には大型の鉈である大鉈も持ち歩いたという。大正4年(1915)7月14から16日にかけて、大阪毎日新聞社の特派員記者(ペンネーム「せみ郎」)が上高地周辺を訪れた際、嘉門次小屋をおとずれ、当時67才の嘉門次から話を聞いている。そのときの嘉門次の姿を次のように記している。「見ると爺さんは紺木綿の野袴に汚れた筒袖を着て其の上にモコモコした狐の皮のジンジン(注 尻当あるいは皮裏のことか?)を着て右の肩からドウマル籠の紐を左の肩からは函鞘の小鉈の紐を掛けて黒犬を先に釣竿を手にして居る格好は如何しても仙人人だと思った」(『山岳』第10巻第2号(日本山岳会、1915)) 形状からして、このときに左肩に掛けていた「函鞘の小鉈」とこの山刀が同一のものとも推測できるが確証はない。

COLUMN ⑤ ライチョウを食する

中部山岳などの高山帯という限られた地域のみで繁殖し、冬も里に降りてくることのないライチョウは、極寒の高山で冬を越す。したがって、ライチョウと出会うためには、昔から人々は高山に足を運ばないといけなかった。このように特定の人としか接することのできなかったライチョウは、一般の人々の生活に深く浸り込む存在でもなく、ましてや常に密着した関係を保ってきたわけではない。

イギリス人宣教師・ウォルター・ウェストンの登山紀行文には自身、あるいは同行の猟師がライチョウを捕らえようとした記述がある。ライチョウは現在、特別天然記念物に指定され、獲って食べるなど考えられない。しかし、ウェストンがライチョウを捕らえようとした明治27年(1894)までは法的に規制はなく、狩猟法が公布されたのは翌年の明治28年である。しかし、この法律の施行規則ではライチョウの捕獲停止期間を4月16日～8月14日と定めてあり、この時期以外は狩猟が許されていた。ライチョウが保護鳥となり、狩猟の対象から外されたのは明治43年である。ライチョウは神の使いで「霊鳥」であるとも言い伝えられている。「霊鳥(れいちょう)」が変化し「ライチョウ」となったのではないかという説もあり、雷除けのお札のデザインにもなっている。当時の人は、ライチョウが「霊鳥」であることは聞き及んでいても、「食」の対象としてライチョウを捕らえていたのかもしれない。

北欧には日本のライチョウに非常に近い種のライチョウが生息している。しかも、緯度が高いので海辺近くでも見ることができる。したがって、ライチョウと人とは狩猟や食材としての関係が結びついている。ノルウェーの書店(決して専門店ではない)の近くの書店にはライチョウのハンティングの本があり、料理本にライチョウの肉料理が載っている。レストランでライチョウ料理を提供してくれるところもある。野生のライチョウは狩猟したあと、軒先に何日も吊るしておいても腐らないが、人工的に飼育したライチョウはすぐに腐ってしまうということである。これは野生の植物を食べているのか、人工飼料を食べているのかの違いであると現地の人が言っていた。ノルウェー北部の中核都市トロンムセにある博物館の古い時代のコーナーにはライチョウを軒先にたくさん吊るしたセピア色の写真が展示されており、狩りの生活を表現したジオラマにもライチョウが逆さ吊りになっていた。

さて、ライチョウの肉の味はいかがなものだろう。肉の色は赤みが強く、決して淡白な味ではない。ノルウェーの料理本によると胸肉のロースト、内臓とも肉のテリーヌ、シチュー、から揚げ、薫製などがおすすめだ。

(宮野 典夫/市立大町山岳博物館 副館長)

参考文献: ウォルター・ウェストン「日本アルプス 登山と探検」岡村精一訳 1995 平凡社 ウォルター・ウェストン「極東の遊歩場」岡村精一訳 1984 山と渓谷社 ウォルター・ウェストン「日本アルプス再訪」水野勉訳 1996 平凡社 A Taste of Norway A Cookbook based on Nature's own Ingredients Aengt Brimi and Bengt Wilson 1990 Norwegian University Press

2-2 伝 嘉門次使用 熊槍(部分) 個人蔵

主にクマ狩りで使用されたと思われる。こうしたクマ狩り用の槍は金属製の穂先部分に木製などの長い柄を備えて使われた。佐藤貢著「アルプスの主 嘉門次」(朝日新聞社、1963)には、嘉門次が行なったと伝えられるクマ狩りの方法が紹介されている。それを要約すると次のような内容である。

クマをねらう時期は、おおむねクマが冬眠から目覚める直前の八十八夜(注 5月2日)頃である。クマの眠る洞穴を見つけると、棒を差し込んで巢穴の奥行きを調べる。穴が浅い場合、木の枝を穴の中に送り込む。するとクマの習性から枝を尻の下に敷き込み続けるので、体が次第に穴の入り口の方へ送り出される。穴の入り口では鉄砲を構えて待つ。やがてクマが自ら穴の入り口まで進んできて姿を現したところを、急所を狙って鉄砲で撃って仕留める。一方、巢穴が深い場合、鉄砲を持つ勢子(せこ・獲物を追い出す役回りの人。対して、勢子に追い出された獲物を仕留める役回りの人を「たつ」という。たつが待ち構える、獲物が出てきそうな場所のことを「たつま」という)を呼び集め、穴の入り口に配置させる。そして、ワラミノを着た嘉門次が尻を先にして洞穴の奥に進み、尻をそとクマの体に寄せる。すると危害を与える気がないクマは体をよける。そのときにクマの背後に回り込み、嘉門次の尻と背中を使ってクマの背中をゆっくり押す。次第にクマは穴の入り口に押し出されてくる。そこを待ち構えて鉄砲で撃って仕留める。

このように鉄砲で仕留めた以外にも、熊槍でクマの急所を突いて仕留めたと思われる。

2-3 伝 嘉門次使用 鉄砲(猟銃) 個人蔵

火縄銃などの銃身をもとにして、後ろから弾丸を込められるように改良したものと思われる

角(八角)銃身を持った火縄銃などの和銃の銃身に後装式(銃尾から弾を装填する形式)の機関部(ボルトを手動でスライドさせて火薬や弾丸を装填する形式であるボルトアクション式)を付けて狩猟用に改良した鉄砲と思われる。銃身には照星と照門があり、銃身と銃床を固定する環帯が1本ある。銃床の尾部分付近には穴が開けられており、ここに負うための紐(負革・おいかわ)を通して銃口部分と結んでいたと思われる。銃床の尾部分の形状が小さく丸みを帯びていることから、銃床の尾部分を肩に密着させて固定する肩付式ではなく、頬に押し付けて固定する頬付式による射撃姿勢で使用されたと思われる。

現在、この鉄砲は嘉門次小屋の営業期間中、同小屋囲炉裏部屋入口正面の壁に、ニホンジカの角と木板で作られた台にすえた状態でピッケルとともに飾られており、訪れた人は気軽に見ることができる。

2-4 伝 嘉門次使用 烏口(からすぐち) 個人蔵

鉄砲の弾丸を入れるための玉袋(たまぶくろ)にカモシカの角を加工した取り出し口が付いたもの

植物の繊維で編んだ袋(玉袋)と同様の紐が付いている。この袋には、カモシカの角の先端から付け根部分にかけて切れ込みが入れられた取り出し口が付けられており、角の先端部分を下に向けて袋の中に入れた弾丸を落とすことなく1個ずつ取り出せる仕組みになっている。烏口という呼び名は、取り出し口がカラスのくちばしに似ていることから付いたと思われる。

2-5 伝 嘉門次使用 火薬入(かやくいれ) 個人蔵

鉄砲に使う火薬を入れた容器

旧式の鉄砲を発砲する際、弾丸推進用として銃身に詰める火薬(玉薬)が必要であった。また、火縄銃には点火・導火用として火皿に盛る粉末状の火薬(口薬)が必要とされた。鉄砲の火薬に用いられた黒色火薬は硝石(硝酸カリウム)を主体に硫黄と木炭を粉末にして混合したもので、湿気や静電気や衝撃に弱い。そのため狩猟の際には、桐や瓢箪などを加工して漆塗を施した容器に玉薬や口薬などの火薬を入れて保存・携帯した。

2-6 伝 嘉門次使用 鉛溶器(鑄鍋・いなべ) 個人蔵

鉄砲の弾丸用の鉛を溶かすために使った金属製の器具

こうした鑄物用の鍋とも呼べる持ち手の付いた金属製の器具を火にかけ、鉛を溶かして鉄砲の弾丸を作った。

COLUMN ⑥ イワナ —在来種の未来は?—

イワナ(サケ科)は夏期においても水温が15度以下の冷水域を主な生息場所とし、河川の最上流部を中心に生息している。イワナは、北アルプスの山岳地帯を流れる渓流を代表する魚類であり、かつては個体数も多く、イワナ釣りによって収入を得ていた人もいた。しかし、河川改修や砂防堰堤の建設や森林伐採、乱獲などにより個体数の減少が起きており、長野県版レッドリストでは準絶滅危惧に挙げられている。

イワナといっても長野県内には2亜種のイワナが生息している。両種は外部形態(斑紋やうろこなど)や生息河川が異なっている。ヤマトイワナは、太平洋に流れ込む木曾川水系、天竜川水系にすみ、ニッコウイワナは主に日本海に流れている姫川、犀川・千曲川水系等と生息河川が異なるといわれていたが、明確には分けられないという。

各河川においてイワナの個体数が減少したことにより放流事業が行われたが、いくつかの問題が起こっている。本来ヤマトイワナが生息している河川に、養殖されたニッコウイワナが放流されたことにより、交雑が起こり遺伝子組成や斑紋の変化が生じている。また、ニッコウイワナにおいても、在来の遺伝子を持つ個体群ではない異なった水系(県外からの場合もある)からの稚魚や卵の導入。さらに一部河川においては、カナダ、アメリカ合衆国が原産の外來種であるカワマス(サケ科)との交雑なども確認されており、各水系にいる在来種の遺伝的的特性の消失が危惧されている。

このままでは、どこの河川でもすべて同じような個体しかいなくなってしまうことにもなりかねない。イワナの遺伝的多様性を保全する必要が生じている。
(清水 博文/市立大町山岳博物館 学芸員)

参考文献: 川那部 哉・水野信彦(編)1989. 日本の淡水魚. 山と溪谷社:114-119. 野村稔・上原武則・奥原保憲・木村英逸・木村晴朗・久保達郎・鈴木亮・富永正雄・中村守純・吉田利男・吉安亮彦1982. 上高地・梓川上流域におけるイワナに関する検討会報告書. 環境庁. 山本聡・小原昌和・沢本良宏・栗坂正美2000. 長野県産イワナの斑点の変異. 長野県水産試験場報告4:16-23. 長野県自然保護研究所(編)2004. 長野県版レッドデータブック動物編. 長野県. 小原昌和・田中一誠・沢本良宏・山本聡2001. 長野県産野生イワナの形態学的変異. 長野県水産試験場報告5:19-24.

2-7 伝 嘉門次旧蔵 ウォルター・ウェストン贈 ビッケル 個人蔵

イギリス人宣教師・ウェストンが嘉門次に贈ったと伝えられるもの。日本の鍛冶屋が製作したものと思われる。ビッケルやブレードなどの部分およびシュピツツェ（石突）の金属部分は鉄製、シャフト（柄）はサクラ類材と思われる。ビッケルとシュピツツェの先端は丸みを帯びているが、作製時からそのような形状だったのかあるいは度重なる使用で磨耗した結果であろうか。ビッケル収集・研究家の平柳一郎氏はこのビッケルに関して次のように記している。

〔前略〕嘉門次小屋に伝承する氷斧（注）は、曾孫の上條輝夫によればその由来はつまびらかでない。密かにウェストンとの関係を期待したが、姿からこれは日本で作られたものであろう。石突きがワンピースで、鉄頭の穴は抜けている。模作の原ビッケルは果たしてどんなものであったか。ノ大正二年に大木操が撮った河童橋でのウェストン夫妻と嘉門次、妙義山の根本清蔵の四人の写真は広く知られている。その時師の持っていたビッケルは、ビッケルが上下から鋭くそがれていて、石突きはツーピースだ。フリッツ・エルクに相違あるまい。記録では、明治末ころ日本にはまだ二種類のビッケルしかなかったようだ。初代のエルクと幻想的なアインズイーデルン(EINSIDELN)の町に生まれたフプアウフ(FUPFAUF)の作品である。後者は石突きがワンピースで、頭はエルクよりさらに小振りのものであった。三度来日したウェストンが日本に携えたいいくつかのビッケルを、嘉門次は案内の都度みていたはずだ。嘉門次小屋伝承の氷斧と、ウェストンとの接点が見えたとどこにあったのか。黒錆の伝承の氷斧は真鍮に口を磨んで語ってくれない。〔注〕平柳氏は脚注に次のように記す「氷斧はアイスアックスでビッケルのことだが、一八六五年ころを境に形態上の変化があった。便宜上ここでは両者の呼称を区別した。」「氷斧とビッケル」〔山と博物館〕第32巻第2号(大町山岳博物館、1987)〕

現在、このビッケルは嘉門次小屋の営業期間中、同小屋の囲炉裏部屋の入口正面の壁に、ニホンジカの角と木板で作られた台にすえた状態で鉄砲とともに飾られており、訪れた人は気軽に見ることができる。

2-8 伝 嘉門次旧蔵 ウォルター・ウェストン贈 写真帳 個人蔵

イギリス人宣教師・ウェストンが嘉門次に贈ったと伝えられるもの。ウェストンが日本人に代筆してもらったと思われる墨書きがある表紙の裏面に残る墨書きは「我が古キ友人上條ノ嘉門司(マ)君ニ日本アルノ(マ)ス登山ノ記念トシノテ寫眞帖ヲ進呈スノ西歴(マ)千九百拾四年四月ノウォルター・ウェストン」。写真帳の中には数点の紙焼き写真が残されている。しかし、台紙だけの頁も目立ち、そこに貼られていたはずの紙焼き写真は過去にはがれて(あるいははがされて)失われたようであり、残念ながら本来の写真帳の全容をうかがい知ることはできない。

2-9 對山館宿帳(写真・コピー複製、部分) 個人蔵 《参考展示》

大正4年(1915)から同11年にかけて(一部昭和3、4年含む)、宿泊した登山者などが思いおもいに書き記した對山館備え付けの宿帳。樹木の絵柄を配した表紙に和紙を綴った帳面で、大町の旅館・對山館に備え付けられていた。当時の登山者などの宿泊者が毛筆と墨などで山行の記録やそのときの思いなどを書き記している。この宿帳は当時の登山史をうかがい知る上で非常に貴重な資料といえる。その中に、大正8年(1919)7月27日にカナダ人・H.E. ドーント(明治後期、神戸在住の外国人たちを中心に結成された山岳会「MGK(The Mountain Goats of Kobe)」の中心会員で、同会では会誌「INAKAJ」(全18巻、大正4～13年)の編集を担当。太平洋戦争の勃発によりカナダに引き揚げるまで、六甲山や南・北アルプスなどで登山活動を展開し、日本山岳会や英国山岳会にも入会。ペンネームは「Blue Dragon-fly」が鉛筆で記した5編の詩があり、最後5つ目の詩は嘉門次小屋来訪時の様子を詠んだものである。これらの詩はドーントが山岳を題材に印象的な場面を詠んだ全30編の詩集「Cameos(ここでは印象的な描写や名場面という意味)」〔山岳〕第13年2号

COLUMN ⑦ 高山植物と薬草採取 —コマクサを中心にして—

高山植物、特にコマクサが薬草として利用されていたことは、多くの書物で触れられ、また信州小諸には、コマクサの和名の由来の一説として、お駒という女性に因むとされる民話があり、そこでもコマクサが薬草として登場する^{※1}。御嶽山ではコマクサは五葉草のひとつに数えられ「百草」の原料として特に珍重されたようである^{※2}。そのほかの五葉草とは、オンタケニンジン(イブキボウフウ)とあるがシシウドとの説もある^{※3}、オウレン、トウヤク(=センブリ)、テングノヒゲである。

百草のはじまりは諸説あるようだが、長野県木曾郡大滝村に本社を構える長野県製薬株式会社によれば「七世紀に役小角(えんのおずぬ)がオウバクエキス薬により民衆を救済して以来、修験者の間で脈々と受け継がれてきたものが、修験者の覚明、普賢によって伝えられたと考えられる。したがって、その起源を覚明行者が御嶽山麓の村民達と関わりを持った1782年としている」とある。そして、百草は伝えられた各家によって言わば生業が異なり、キハダ(オウバク)を主に、五葉草のほかグンノショウコやオウゴンなども配合されていたそうである。そして、信者が御嶽山登拝の際に自らの健康を祈って服用し、これを土産として家族や近所へ持ち帰るようになり、御嶽信仰が広がるとともに全国に知られるところとなったとのことである。

いっぽう、長野県衛生部薬務課が1990年に発行した「信州の民間薬〜くすりのルーツを探る」によれば「御嶽行者は病気に苦しむ信者に対して、祈禱が終わった後「御神水」とか「お水」と称される御嶽三の池の水をびんや竹筒にとり、その中へ山麓にはえる薬草の「とうやく」「おうれん」「こまくさ」等をきざんで加え、一定期間飲むように指示し与えている」^{※3}とあり、小谷宗司氏(長野県薬草生産進行組合副組合長)は、幼少の頃、実際にコマクサが自宅(木曾郡大滝村)の店先で販売されていたことを記憶していた。

また、明治43年(1910)の記録によると「駒草の如きは最も尊重され、御岳ではすべて採取し尽くされ、他より輸入を仰ぎつつあるが、その価格は一円に三十丸(注 112.5g)位の相場にして、木曾地方だけでも一年間売上高二千円位に達している」^{※4}とある。つまり、225kgものコマクサが1年間に販売されていたことになる。「他より輸入」とは、乗鞍岳、八ヶ岳、有明山、燕岳、蓮華岳、白馬岳^{※5,6,7}などからであって、各地から木曾地方へ運ばれたと思われる。コマクサは御嶽信仰には欠かせない植物「薬草」であったと言えるのではないだろうか。

(千葉 悟志/市立大町山岳博物館 学芸員)

※1 池原昭治(1993)御嶽山のコマクサ、日本の民話300 旅先で聞いた昔話と伝説、pp.243-244、木馬書館。

※2 長野県衛生部薬務課(1990)百草の成分、薬効等、信濃の民間薬〜くすりのルーツを探る〜、pp.52、長野県衛生部薬務課。

※3 長野県衛生部薬務課(1990)御嶽行者、信濃の民間薬〜くすりのルーツを探る〜、pp.57、長野県衛生部薬務課。

※4 長野県製薬株式会社(2004)2御嶽の薬草、長野県製薬五十年のあゆみ、pp.13、長野県製薬株式会社。

※5 長野県製薬株式会社(1993)長野県製薬(株)五十年のあゆみ、五、明治時代の薬草事情(薬誌誌抜粋)(一)御嶽の百草、pp.23-24、長野県製薬株式会社。

※6 三井嘉雄(1979)コマクサ哀惜譜(1)、山と博物館24(8)、pp.4、市立大町山岳博物館

※7 三井嘉雄(1979)コマクサ哀惜譜(2)、山と博物館24(9)、pp.4、市立大町山岳博物館

(日本山岳会事務所、1919)掲載の一部である。ドーナトは北アルプス登山の折、大正5年(1916)7月23日に嘉門次小屋を訪れている(ドーナトは『山岳』第13年第2号に「A Crack with Kamonji(嘉門次雑談)」という一文も寄稿しており、そこで嘉門次と小屋の様子を記している)。その数日後、對山館に旅装を解いたドーナトが先述の宿帳に書き記した詩の一編は次のようなものである。

Lakelet green of gold where / the brown trout swim, / And Kamonji's hut smoked black / and sticky: / 'Tis the silent toast we may / drink to him, / Lovely My-o-jin-ike.

(対訳)イワナが泳ぐ小さな湖はこがね色や青緑色で、嘉門次の小屋はいぶされ真っ黒くすすけている。我々は嘉門次のために黙して乾杯する、美しいミョージンイケよ

2-10 伝 品右衛門使用 釣竿 当館蔵

ホテイチクを用いた自作のものという。それぞれの部分を縫いで一本の竿にしたものとも思われるが、実際の縫ぎ方ははっきりとしない

ホテイチクは直径2~5cm、高さ5~12mほどのマダケ属の竹。根本に近い基部にある節の間隔が極端に詰まっていて、節同士が互い違いに斜めになっている。その部分の節間が膨らみを帯びている様子が七福神の布袋様の腹部を連想させることが名前の由来という。乾燥すると折れにくく、膨らんだ節の部分が握りやすいため、釣竿として利用される竹である。この釣竿は根本に近い部分を加工した部分(太く長い竿)と、枝下から先端あたりまでの部分を加工した部分(細く長い竿)と、先端に近い部分を加工したと思われる部分(細く短い竿)とがあり、これら3本が個別に存在している。一見したところ、太く長い竿を手元に、細く長い竿あるいは細く短い竿を穂持から穂先にして継いだとも推測できるが、実際の使用状況ははっきりしない。この釣竿のほかに、品右衛門が使ったと伝えられる釣りの道具として、受け網があったというが現存は確認されていない。いずれにしても、品右衛門はこのようないろんな加工を施していない無造作な自作の釣竿に釣糸を結わえ、糸の先に毛鉤を付けて水面を流し、毛鉤に食いついたイワナを釣り上げ、それを手網で受けて魚籠に入れたようである。

2-11 伝 品右衛門使用 皮鉢(かわばち) 当館蔵

魚を入れる樹皮製の箱。水に沈めて生質(いけす)にしたり、保存・運搬箱として焼き枯らしたイワナを詰め込んだりしたと思われる。サワグルミ(樹高30mほどになるクルミ科の落葉高木。沢など山間の湿地に自生)の樹皮をシナノキ(樹高20m以上になるシナノキ科の落葉高木。山地に自生)の樹皮から作った繊維で縫い合わせて作ったもの。こうした皮鉢の製作方法は、かつて木管方面から伝播したという。必要に応じて山中で樹皮を剥いて作った。渓谷での釣りの最中では浅瀬や淵などの水中に皮鉢を沈め、釣ったイワナを生きたまま保存するための生質代わりにした。また、釣りためたイワナを持ちこさせるために囲炉裏を使って焼き枯らした(薫製状に加工して保存処理すること)イワナを山から里へ背負い下る際、イワナを詰め込む運搬箱として皮鉢を利用した。

2-12 伝 品右衛門使用 肩掛(かたかけ) 当館蔵

鉄砲の付属品一式を紐でつないだもので、首に回し肩に掛けて腕に携帯したという。左から火薬入各種、針金、烏口。品右衛門は火縄銃を使って狩猟を行なったといわれるが、品右衛門使用と伝わる鉄砲の現存は確認されていない。品右衛門が使用した鉄砲が火縄銃であったのか、あるいは火縄銃など和銃の銃身に後装式(銃尾から弾を装填する形式)の機関部を付けて狩猟用に改良した銃であったのかは定かではない。いずれにしても、そうした鉄砲を撃つためにはこの肩掛にあるような様々な小道具が必要であった。

2-13 伝 品右衛門使用 火打金(ひうちがね)付き火口入(ほくちいれ) 当館蔵

自作による火起こしの道具。木製小筒の火口入に鉄製の火打金(火打鎌)が紐で結ばれたもの。オオヤマザクラの樹皮を用いた樺細工(桜皮細工)を一部施した木製の小筒は火口入で、中には着火材である火口としてブナの木炭を粉末状にしたものを入れた。樺細工は防湿・防乾効果のある装飾である。火口入の蓋部分に紐で結ばれた鉄片(焼き入れを施された鋼と思われる)は火打金(火打鎌)。これを火打石に打ち擦り合わせることで火花を散らし、火口に着火させた。

2-14 伝 品右衛門使用 火打袋(ひうちぶくろ) 当館蔵

口元に紐が付いた自作による革製のもの。火起こしの道具一式を入れて持ち歩いたという。火打金付き火口入のほかに、品右衛門が使ったという火打石もあったようだが現存は確認できない。そうした火起こし道具一式をこの火打袋に収納して携帯したと思われる。ほかにも品右衛門が使ったと伝えられるカモシカの角とクマの歯が使われた自作の煙草入と既製品の煙管(きせる)(加えて自作の煙管筒もか?)があったようだが現存は確認されていない。おそらく加工された角や歯が根付や緒締の部分に用いられた煙草入には刻んだ葉タバコが入られ、煙管を収納する煙管筒が付いた状態で腰に提げて携帯する提げ煙草入と呼ばれるものだったと思われる。

民俗学者・向山雅重は『遠山品右衛門翁遺品』『山と博物館』第6巻第1号(大町山岳博物館、1961)の中で、火起こしの方法について次のように記している。「火をつけるには、まずキセルに煙草をつめその上にブナの炭をのせ、ヒウチ石をヒウチ金で打って火花を出し、その火を炭につけ、煙草を吸いつけ、次にタバコの火で、ワラジのいたんだものからワラクスをとり、そのワラクスにつけて火を焚いたもの。」

2-15 火起こしの道具類 当館蔵 《参考展示》

火打石(ひうちいし)。火口(ほくち)。付木(つけぎ)。火縄(ひなわ)。火打石に利用されたメノウ(瑪瑙)。ほかにも玉髓(ぎょくずい)などの岩石が火打石に用いられた。火口とは火打金と火打石によって打ち出された火花を受けて着火させるもので、消炭(けしずみ)の粉末などが原料にされた。この火口はオガラ(麻の表皮を剥いたあとの葉である麻幹のこと)の消炭(一度火を付けてから消した木炭のほか、植物の燃え殻のこと)を粉末状にしたものとガマの穂を混ぜ合わせたもの。火口の原料や製造方法は地域によってさまざまであった。先端に硫黄が塗られた薄削りの杉板で作られた付木。着火した火口からこうした付木に火を移し採り、焚き火などの火種にした。火縄はヒバ(ヒノキアスナロ、アテ、アスナロ)の総柄。比

較的耐水性があり湿気に強い)の樹皮や木綿や竹の繊維を編んで縄にない、黒色火薬の主成分にもなる硝石(硝酸カリウム)を染み込ませたもの。着火しやすく、種火を長い時間維持することができた。周知のように火縄銃という名は、火縄に着火させた火を種火とし、これを用いて火薬に引火させて弾丸を発射させたことから付いたものである。

2-16 伝 品右衛門使用 襦袢(じゅばん・ジバン) 当館蔵

木綿平織による筒袖(つつそで)の単(ひとえ)の襦袢。四季を通じて着用したという仕事着
身頃や袖・襟・衿(くび)ともに、黒地に白の棒縞模様の木綿平織生地で作られている。襟・衿あたりまでの一部分のみ浅黄木綿による裏地が付いているが、裏地の付かない単の着物である。品右衛門がこの着物の下に身に付けたという紺木綿製の胸前掛もあったようだが現存は確認できない。

2-17 伝 品右衛門使用 シブヨッコギ(渋よっこぎ) 当館蔵

撥水・防水・防風性を増すために木綿の白木地を渋染(しぶぞめ・柿渋で染め込むこと)した袴(はかま)の一種。冬もこれで過ごしたという

こうした日常の農作業や山仕事で着用された袴はヤマバカマ(山袴)と総称され、地域によってはユキバカマ(雪袴)などともいい、呼び名や形状は多種多様である。これは後マチが膝より少し下の脛の中ほどで終わっており、裾口がなくて裾がきっちりして、股が自由に広がるのが特徴で、この地域で行なわれていた裁ち方という。膝の部分には、はぎが多数重ねられている。熟れる前の渋柿を搾った生汁をねかせて発酵させて作る柿渋で全体を染め込んである。これにより、渋染は雪が付きにくく、水がしみ込みにくく、風が通りやすく、濡れても水切れがよく、乾きが早いので、冬山には最適だったという。

2-18 伝 品右衛門使用 脛巾(はばき) 当館蔵

ガマを編んで作られた脛当(すねあて)。木綿の裏地付き。柿渋で染め込まれてあり、主に冬の猟で身につけたものと思われる
片方の裏地の一部に糸編みの布切れ(靴下などの一部か?)が縫い付けられているが、縫い糸の状態などから後年になって付けられたと考えられる。

2-19 伝 品右衛門使用 アツケボウシ(踵帽子・踵掛) 当館蔵

藁(わら)で編んで作られた踵(かかと)を覆う藁沓。雪の中を歩く際、爪先を覆う藁沓であるシツベソ(爪掛)と併用して履いたという
このほかに、品右衛門が使ったと伝えられる、丈夫にするために生皮で巻いて作った乗緒(のりお)の輪襪(わかんじき)があったというが現存は確認できない。これらを履いた足回り支度で冬のカモシカ猟に行ったと推測される。一方、品右衛門が夏の渓流でのイワナ釣りでも履いた(あるいはそれと同形のものか?)と伝わる足半(あしなか)もあったというが現存していない。足半はその名の通り、底が通常より半分ほどの短さになった草鞋のことで、爪先と踵の部分が地面に直に接するので爪先と踵がよく効いた。また、底が短いので、底と足裏の間に小石や砂が入っても水の流れて払い流せ、渓流釣りには適した履物だったという。

2-20 腰布団(こしぶとん) 当館蔵 《参考展示》

木綿布に真綿を入れて作った尻当。品右衛門使用ではないが遠山家旧蔵のもので、品右衛門も同様の腰布団を身に付けて冬の猟に行ったという
このほかにも、品右衛門が雨具・防寒具・寝具として1年を通して使用したと伝えられるカモシカ毛皮製の皮蓑(かわみの)があったというが現存は確認されていない。

2-21 伝 品右衛門使用 シルデンコ(汁でんこ) 当館蔵

白木で作られた円形の曲物。密閉できる蓋が付いた汁物容器

2-22 伝 品右衛門使用 横面桶(よこめんづ) 当館蔵

メンバとも呼ばれる楕円形の曲物で、外側に黒色、内側に朱色の漆塗が施されている。昼食などの飯を詰め込む弁当容器
底面に朱塗で文字が記されており、「信州福島町ノ加藤□□(2字不明)製」?とも読めることから木曾漆器と推測されるが、文字の完全な判読は困難である。これに飯を詰め、シルデンコとともに麻縄を網状に編んだスカリなど携帯用の袋に入れて背負った。背負い道具としては、品右衛門が冬山に愛用したと伝えられるカモシカ皮製の背負袋があったというが現存は確認できない。

2-23 伝 品右衛門使用 帽子 当館蔵

つばにあたる部分は折りたたまれており、伸ばすと目出帽にもなる。里での生活において外出時に使用したものという
裏地の付いた茶色のフェルト製帽子。山から里に下りて町(主に大町)へ用事に出掛けるときや、客人として招かれるときなどに使用したという。この帽子からは品右衛門の里での生活の一部をうかがい知ることができる。

2-24 伝 喜作使用 狩猟刀 安曇野市穂高郷土資料館蔵

猟で獲った鳥獣の皮を剥いたり、肉を解体したりするに使ったという短刀
両刃の和式ナイフといったところか。鐔(つば)付き。柄の握りは革製の柄巻(一部種類の異なる革(サメ皮か?)で装飾が施されている)。

2-25 伝 喜作使用 鉄砲(猟銃・部分) 当館蔵

銃床(じゅうしょう)など一部。もとは元折式(銃身を二つに折って火薬や弾を装填する形式)単発銃であったと思われる

ハーフピストル型と呼ばれる握り(真っ直ぐな握りではなく下に丸みを帯びた突起が出たもの)のついた木製の銃床には、金属製の床尾板と後背環状が付いている。銃身および元折式による後装式の機関部の主要部分は欠損してないが、針金によって巻かれた(補修・補強のために喜作の使用時からのものか?)金属製の用心鉄や引鉄などが銃床に残されている。山本茂実著『喜作新道—ある北アルプス哀史—』(朝日新聞社、1971)で「紛失」となっている「本(マ)折有ケイ筒銃」あるいは「喜作式手作銃(密猟用)」のいずれかに当たるものか。後者は喜作・一男親子が雪崩によって死亡した樺小屋沢の遭難現場から喜作の自宅へ持ち帰られたもので、喜作の末っ子・利喜蔵ら子供が玩具代わりにして遊んだという。その当時の状態は折れた銃で針金を巻いてあったという。『喜作新道』によると、ほかにも喜作愛用の猟銃として「村田短銃12番」「村田改造銃30番」「ダマスカス二連銃」があったとされる。

2-26 伝 喜作使用 弾帯 安曇野市穂高郷土資料館蔵

弾丸や散弾と火薬や雷管などを薬莢(やっきょう)に詰め込んだ実包を携帯するための革製ベルト
この弾帯に収納された状態に残っているのは30番径の真鍮製の薬莢。散弾銃などの口径は番(ゲージ)という単位で表示される。30番という口径の内径は約13mm。現在、国内ではクマやシカなどの大型獣に使われる弾丸は12番(約18.5mm)の散弾で、それ以上の口径の散弾銃は使用禁止となっている。

2-27 伝 喜作使用 鉄砲の道具類 安曇野市穂高郷土資料館蔵

火薬計量器と火薬の缶。30番実弾鉛錐型(玉錐型)。鉛の散弾と鉛板と鉛粒。散弾用鉛溶器(鑄鑄)。猟用村田雷管と携帯用の缶。30番真鍮薬莢と雷管詰器。弾の箱(弾丸保管用の木製容器)

2-28 伝 喜作使用 鷹口(とびくち)(部分) 当館蔵

本来、檜などの堅い木で作った柄が備えられる
鉄製の鉤(かぎ)部分(あるいは柄部分も含めた全体)を鷹口(あるいは鷹)といい、猛禽類のトビのくちばしに似ていることが名前の由来。金具部分を木材に食い込ませて引いたり、柄部分を榫(てこ)にして木材を転がしたりして使う。もとは鷹の者と呼ばれる土木・建築工事で足場の組み立てなどを専門にする職人や江戸時代の町火消しが使った道具。山においては斜面を登る際の手掛かりに使ったり、歩く際の杖として使ったりしたと思われる。

2-29 伝 喜作使用 背負袋 当館蔵

カモシカ毛皮製の袋に、背負うための植物繊維で編んだ肩紐が付けられたもの。自作のルックザックといったところか

2-30 伝 喜作使用 足皮(あしかわ) 当館蔵

カモシカの足部分の毛皮を使って袋状に縫い合わせた履物。雪面を歩くときの防寒・防水用に甲掛足袋の上などに履いた
この足皮の内側には藁が残っており、おそらく藁製の履物を甲掛(こうがけ・足袋(たび)の底部分がない甲の部分のみを覆うもの)や足袋に重ねたか、甲掛や足袋と足皮の間に藁を敷き詰めたものと思われる。自作のオーバーシューズといったところか。

2-31 伝 喜作使用 輪標(わかんじき) 当館蔵

雪上を歩くとき脚がはずまないように履物の下に付ける道具。乗結(のりお)(足を乗せて固定する紐の部分)には麻縄が使われている

2-32 伝 喜作使用 鉄標(かなかんじき) 安曇野市穂高郷土資料館蔵

主に積雪期の氷雪上や残雪期の雪渓を歩くときに履物の下に付けた鉄製の道具。足に巻いて固定するための皮紐付き

2-33 伝 喜作使用 新道開削・山小屋作りの道具類 安曇野市穂高郷土資料館蔵

喜作新道開削や殺生小屋建設に使ったという鉋(大鉋、小鉋)と大工道具(白彫手斧(うすぼりちょうな)、立白削(たちうすけずり))
大鉋は木製鞘付。手斧(鉋)は木材をはつる(荒く削る)のに使う柄の曲がった斧をいう。白彫手斧は一般的な手斧に比べると鍛造鉄製の刃部の幅が狭く木製の柄が短い形をしており、白や木鉢などの内側を削るときに使う道具と思われる。立白削は白の底部分を削るときに使われる道具と思われ、木製の柄に鍛造鉄製の刃部が内側に反った穂先が付いた槍鉋(やりがんな、鉋・鉋)である。
喜作は22才で自分の家を自ら建てたほど器用だったという。大正10年(1921)春から秋にかけての突貫工事で殺生小屋が建設されたが、牧の大工・寺島文治が主だった柱などを建てて山を下った後は、屋根や戸なども含め全て喜作が自ら小屋作りを行なったという。

2-34 常念坊乗越小屋宿帳「胸中のアルプス」(写真複製・部分) 個人蔵 《参考展示》

大正8年(1919)から同9年(1920)にかけて、宿泊した登山者などが思いおもいに書き記した常念坊乗越小屋(後に常念小屋)備え付けの宿帳和紙を綴った帳面で、表紙には「大正八年七月上／胸中のアルプス／常念坊」と墨書きされている。小屋開業当初に宿泊した登山者らが毛筆と墨などで山行の記録やそのときの思いなどを書き記している。この宿帳は当時の登山史をうかがい知る上で非常に貴重な資料といえる。その中に、大正8年(1919)8月17日に挙行された小屋開業の祝賀式に参列した登山者らの名前が記されており、土木作業など小屋の建設に携わった牧の住人たちの筆頭として喜作も名を連ねている(記された喜作の名前は代筆によるものと思われる)。参列者たちの名前が記された最後の頁には、「ぎり隣れて／鎗(マ)見ゆるかな／常念(僧侶・常念坊と思われる杖を持った人物の後姿をしるした素描が添えられている)／牧案内組合」という一句が記されている。「牧案内組合」とは喜作などが世話役となって、その年(大正8年)に結成された常念口登山案内人組合のことと思われる。
常念坊乗越小屋は大正8年7月27日に山田利一によって開業された。山田の生家は松本市大九町の和泉屋足袋店という商店であった。山田は、同町で呉服屋を営む家に生まれた土橋三三(大正11年8月槍ヶ岳小鎗登攀(初登か?)など記録残す)と、同町で生家がみすず細工という竹細工店を営んでいた穂高三寿雄(槍ヶ岳山荘創始者)の2人とともに、同町商店で組織する青年会である正交会(しょうこ

うかい)の中心会員であった。

2-35 殺生小屋物品調(大正十二年七月五日調) 個人蔵

喜作の死後、殺生小屋の持ち主である中房温泉の百瀬家から小屋を借り受けて経営にあたった松本の住人が、小屋に残されたままになっていた喜作の持ち込んだ品物を調べて記録したものの。この品物の代金として当時30円が喜作の家族に支払われたという。

2-36 喜作・一男 葬儀の弔辞 個人蔵

大正12年(1923)3月20日に牧の自宅でとり行われた喜作と一男の葬儀において奉呈された信濃山岳会による弔辞
喜作は生前、信濃山岳会の会員を山に案内することもあった。また、喜作が遭難死する2ヶ月前の大正12年1月、信濃山岳会は松本の料亭・松本館で開いた新年会に喜作を招待し、山の話を行なってもらっている。この席に喜作はカモシカ1頭をそっくりそのまま持参し、参加者で記念撮影を行なったという。信濃山岳会は喜作と一男の葬儀に弔辞のほか花輪と香典を贈っている。

2-37 吉田博画「獵師の話」 吉田博・白旗史朗著/講談社出版研究所編「山の絵本 日本アルプスと富士」(講談社、1981)

当館蔵(参考展示)

版画家・吉田博が大正11年(1922)に制作した木版多色刷による版画で、描かれた人物は小林喜作をモデルにしているという。博は北アルプスでの登山案内を通じて喜作と親交が厚かった。博が「喜作新道」という呼び名の命名者であるといわれている。

この作品は博の本格的な木版画として出版販売された作品のひとつだった。大正13年にアメリカで開催された展覧会においてこの作品は、光と影の微妙な描写が17世紀を代表するオランダの画家・レンブラントと比較されるなど好評を博した。一説には人物の顔が喜作よりも大井庄吉に似ていることから、喜作亡き後、山案内に雇った庄吉の姿を通して喜作を思い描いたのではないかとみられる。博が命名したといわれる喜作新道は、今ではアルプス銀座などと呼ばれる縦走路の一部として登山者に広く知られる。この喜作新道について、日本山岳協会会長や日本山岳会会長などを歴任したジャーナリスト・松方三郎は次のように記している。

「大天井から槍に抜ける尾根伝いの道を「喜作新道」と呼んでいる。／里から烏川に入って槍へ抜ける最短距離として彼が愛用したルートであるが、「銀座通り」などといわれる燕・大天井の尾根道などは、喜作にとっては本当の意味での銀座通りであった。つまり、晩飯を殺生的小屋ですませ、一服やったあとで提灯をぶらさげて、中房までその晩のうちに飛ばしてしまうのである。夏の夕涼みに銀座へ流れてくるその気楽さで、また実際それほど容易に、あの尾根を飛ばすのである。」(松方三郎著「喜作の場合」『アルプス記』(龍皇閣、1937))

3-1 内野常次郎使用 鉄砲(獵銃) 松本市安曇資料館蔵

火縄銃の銃身をもとにして、後ろから弾丸を込められるように改良したもの

牛丸工著「上高地の常さん 山に生きた男の物語」(信濃毎日新聞社、1996)にはこの鉄砲の作りや由来について詳細に記されている。それによると、江戸時代に紀州(現和歌山県と三重県南部)で作られた火縄銃の銃身に明治時代以降になってボルトアクション式の後装式機関部が取り付けられた改良銃という。銃身は角(八角)銃身だった銃口の外側部分を丸く削って丸銃身にしてあり、照星と照門が付き、わずかに打刻された銘が残る。機関部と銃床を固定する環帯が1本ある。金属部品が付けられた銃床の尾部分は形状が小さく丸みを帯びていることから、銃床の尾部分を肩に密着させて固定する肩付式ではなく、頬に押し付けて固定する頬付式による射撃姿勢で使用されたと思われる。伝えられるところによると、常次郎が旧蔵した鉄砲は村田式銃(年式不明。あるいは村田式銃と同形の獵銃か?)、二連発銃、ウォルター・ウェストンからもらった銃の3丁だったといい、この鉄砲がウェストンからもらったと伝えられるものであるかも知れないというが真相は明らかではない。

3-2 内野常次郎使用 釣りの道具類 個人蔵・新穂高ビジターセンター山楽館展示

ナイロン製投網(とあみ)。ブリキ製魚籠(びく)。木製蓑札(入林許可証、漁業許可証2枚)

漁業許可証の1枚は、大正5年(1916)6月に南安曇郡役所が発行したもの。大正4年6月の焼岳噴火によって梓川が堰き止められてきた大正池の漁権は常次郎と大井庄吉が独占していたという。ここで常次郎が獲ったイワナは上高地の旅館へ売られるより、常次郎の小屋にたむろした学生登山者などに振舞われることの方が多かったという。

3-3 内野常次郎旧蔵 秩父宮登山記念本「奉迎記念」(上宝村、1928) 個人蔵

昭和2年(1927)8月23日、内野常次郎と大井庄吉は、飛騨の案内人・今田重太郎、中島政太郎、秩父宮家御用掛・渡辺八郎、慶應義塾山岳会 OB・横有恒、早川種三、学習院山岳部 OB・岡部長量とともに、秩父宮の槍ヶ岳～穂高連峰縦走に同行した。これはその登山を記念して当時上宝村で作成した本で、秩父宮へ献上されたほか関係者に配布されたものと思われる。常次郎は上高地をたびたび訪れた秩父宮や勢津子妃とともに明神池で釣りを行なっている。その際の逸話は「オカミサン事件」として語り継がれている。

3-4 内野常次郎使用 慶應義塾山岳会贈 ビツケル 個人蔵・新穂高ビジターセンター山楽館展示

昭和3年(1928)3月25日、慶應義塾山岳会 OB・大島亮吉が前穂高岳北尾根で遭難(同年6月1日に常次郎の愛犬によって遺体発見)した際、救助・捜索に参加した常次郎へ慶應義塾山岳会からお礼として贈られたもので、身長に合わせて自らシャフトを短くした。同じくこの遭難の救助・捜索に参加した穂高岳山荘の創始者である飛騨の案内人・今田重太郎にも同様のビツケルが贈られている。

3-5 遠山林平使用 釣具一式 当館蔵

馬の尻尾を使ったテグス、毛鉤(けばり)の材料に用いた地鶏のハックル(毛鉤製作用に雄鶏などの首周りなどの羽根を多くは皮付のまま剥いたもの)、釣針などが収められた小型の柳行李。ワカサギ釣り用と思われる木製糸巻付の竹製の小型の釣竿。

3-6 遠山林平使用 チブクロ(ち袋) 当館蔵

カモシカ毛皮で作った腰袋(こしぶくろ)。もとは品右衛門が使用していたもので、後に林平が買い受けたという。昼食用に、残り飯と米の粉をこね合わせて手のひら大に伸ばしたものを2枚と少しの塩をこの袋に入れて持って出たという。毛皮製の袋であり、腰に密着させて提げるので、冬の寒いときでも中身が凍ることはなかったという。

3-7 鬼窪善一郎使用 キレモノ(切れもの) 当館蔵

鎌の刃部を加工した自作の狩猟用小刀。獲った鳥獣の皮を剥いたり、肉を解体したりするときなどに使った

3-8 鬼窪善一郎使用 弾丸 当館蔵

鉛製の弾丸

善一郎は中古で手に入れた24番口径(約14.5mm)の村田式銃(年式不明。あるいは村田式銃と同形の猟銃か?)を長年愛用し、それを使ってクマなど大型獣をはじめ様々な鳥獣を獲ったという。この弾丸はその鉄砲に使われたものと思われる。

3-9 鬼窪善一郎使用 鷹口(とびくち) 市立大町山岳博物館

冬山・春山の猟にはこの鷹口を必ず持って行き、時には鉄砲の代わりに鷹口を使ってカモシカを仕留めたこともあったという。柄は雪道標識用のワラン製ポールが使われているが、善一郎は自分の背丈ほどに合わせてダケカンバの木で作るのが最適だとしている。鉄製の鷹口は鍛冶屋に頼んで打ってもらった長5寸(約15cm)のもの。善一郎は鷹口を“命の親”と称し、夏山の山案内でも手放すことなく愛用した。

3-10 鬼窪善一郎使用 胴着(チョツキ) 当館蔵

カモシカ毛皮を裏地に使ったコールテン製のもので、猟などで身に付けた

3-11 曾根原文平使用 釣りの道具類 当館蔵

毛鉤(けばり)。釣竿(つりざお)。受網(うけあみ)。魚籠(びく)。背負籠(せおいかご)

毛鉤は巻きの部分が雄鶏の羽製。釣竿は延べ竿を継ぎ竿に改良したもの。穂先からの3つの部分は竹製で、手元の部分は木製。魚籠は藤製。背負籠はネズコの樹皮を編んだ袋に負い紐を付けた自作のもので、ネコザあるいは背負い子と呼んだという。イワナ釣りの際、行きは弁当を、帰りは釣った魚を入れて使った。

3-12 曾根原文平使用 鉈 当館蔵

皮鉢や背負籠、イワナ焼き用の串や囲炉裏の火棚(ひだな)、小屋屋根の葺き板を作るときなどに使用

3-13 曾根原文平使用 手鋸 当館蔵

皮鉢や背負籠、イワナ焼き用の串や囲炉裏の火棚、小屋屋根の葺き板を作るときなどに使用

刃部には「□□(2字不明)吉三郎作」と打刻された銘がある。付属の木製の鞘には家印の焼印が押され、「昭和廿五年十月」との墨書がある。

3-14 曾根原文平使用 カンテラ 当館蔵

黒部渓谷でのイワナ釣りにおいて、日が短くなった時季に小屋へ戻るときに足元を照らして使った

カンテラ(ガスカンテラ)はブリキあるいは銅板で作られた胴の下部にカーバイドを燃料として入れ、胴の上部から水を加えることで発生したアセチレンガスを火口から出して燃焼させて光源にする照明器具。

3-15 曾根原文平使用 飯盒(はんごう) 当館蔵

戦後、旧高州から引き揚げるときから使用し、イワナ釣りの際に必ず携帯した

アルミニウム製。飯と汁物を同時に煮炊きできるように同容量の中盒と外盒とが一つに収納できる型になっており、軍隊用のものという。

3-16 小林一男使用 手帳 個人蔵

大正9年(1920)5月から同10年1月までの日記。農作業、山仕事や猟、山案内、青年団の活動など、18才頃の一男の日常が書き留められている

3-17 丸山市三郎使用 ピッケル 当館蔵

細野の案内人・丸山市三郎が使ったもの。昭和初期頃に地元の鍛冶屋が製作したものと思われる

シュピツェは付近のシャフト部分から分離した状態である。市三郎は明治39年(1906)8月、当時、旧大町中学校の生徒だった百瀬慎太郎と年長の友人3名を白馬岳へ案内している。これは慎太郎にとって初めての北アルプス登山だった。後の大正3年(1914)7月末、市三郎は大町の案内人・大西又吉とともに、百瀬慎太郎、八代準、伴野清、大島永明による立山から鷲岳への縦走も案内している。

3-18 大町登山案内者組合の印章 個人蔵

百瀬慎太郎旧蔵の品。同組合は大正6年(1917)の結成から昭和18年(1943)の旅館・対山館廃業頃まで、事務所を対山館内に置いた

3-19 大町登山案内者組合の記章 個人蔵

百瀬慎太郎旧蔵の品。三角形の方は同組合結成10周年記念に**昭和2年(1927)**頃に製作され、組合員などに配られたものと思われる

3-20 黒岩直吉使用 スキーとスキーストック 当館蔵

大町登山案内者組合創立時の組合員である黒岩直吉が使ったもの。大正期ころから使用したものと思われる
直吉は大町における初期の案内人・伊藤菊十と親交があったことから、誘われて同組合に参加したという。

3-21 松澤由蔵使用 ビッケル 当館蔵

大町登山案内者組合創立時の組合員である松澤由蔵が案内した登山客から昭和初期ころに贈られたもの
2つの金属製のリングは後に付けられたものと思われる。ビッケル部分に刻印されていたと思われる銘は磨耗して判読できないが、昭和初期頃に輸入されたスイス製のものか？ 由蔵は大町における初期の案内人・伊藤菊十と親交があったことから、誘われて同組合に参加したという。

3-22 松田茂一使用 ビッケル 当館蔵

大町登山案内者組合創立時の組合員である松田茂一が使ったもの。シャフト(柄)には節のある天然木が使われており、杖に近いビッケルとブレードの部分は小振り、スイスのエルク製の初期ビッケルに似ている。国内にビッケルが持ち込まれるようになったころ、持ち込まれたビッケルに似せて地元などの鍛冶屋に作らせたものと思われる。

3-23 西澤彰使用 荷杖(につえ) 当館蔵

大町登山案内者組合創立時の組合員である西澤彰(後に倉科)が使ったもの。ネツエあるいはニンボウとも呼ばれる杖
こうした先端に金具のついた鷹口のような杖や先が股状に分かれた枝木で作った杖などを山案内人や荷担ぎは登山時に背負子とともに使用した。

3-24 西澤彰旧蔵 写真帳 当館蔵

大町の案内人・西澤彰が案内した登山客から贈られたもの
大正14年(1925)7月の成蹊高等学校(旧制)山岳部による山行記念の写真帳。スチールカメラが一般に広く普及していなかった大正から昭和初期頃、登山者が山行中に撮影した紙焼き写真やそれらをまとめた写真帳を感謝と記念の印として、同行した山案内人へ贈られることもあったようである。

3-25 櫻井一雄使用 スキーシール 当館蔵

大町登山案内者組合創立後しばらくして組合員となった櫻井一雄が大正期から昭和20年代ころまでスキー登山の際に使用したもの。
アサラシ皮製
一雄は櫻井伴五郎(本名・長作か?)という大町の猟師を祖父に持ち、山に詳しい叔父の櫻井郡三郎から山を教わり、大正7年(1918)頃に大町登山案内者組合に加入したという。加入後は、大町における初期の案内人・大西又吉を山の師匠とした。

3-26 平林高吉使用 印半纏(しるしばんてん) 当館蔵

大町登山案内者組合の組合員が揃いで着たもの。襟には「日本アルプス」「大町口案内者」と染抜されている。紺木綿製
昭和初頃に櫻井一雄に誘われて大町登山案内者組合の組合員になった平林高吉が身に付けたもの。羽織に似て丈が短く折り襟でない、胸紐の付いていない上着である半纏は庶民の衣服として広まり、江戸後期には煮の者や左官や大工といった職人が襟や胸周りや背面に屋号や家印などの記号や模様や文字を染抜によってつけた紺染の木綿や麻製の印半纏を着るようになった。一方、半纏より丈が長く広袖で折り襟でない、胸紐付きの上着である法被は武家屋敷への出入を許された中間(ちゅうげん・武士に仕えて雑務に従った男性)が身分証明に着用した、家主の家紋などをつけた衣服。しかし、半纏と法被は形態的に大きな差がなく、江戸時代後期に半纏が流行すると両者の混同が進み、現在ではほとんど区別されていない。

3-27 小日向梅治使用 入林許可証と案内人許可書 当館蔵

入林許可証は昭和10年(1935)6月27日、大町営林署発行。案内人許可書は大正14年(1925)8月6日、大町警察署発行
入林許可証は昭和10年7月から同12年6月までの2カ年において北安曇郡内の国有林に登山案内のため入林することを認めたという証書で、入林者心得という注意事項も記されている。案内人許可書の「案内ノ場所」という欄には「針木(マ)より立山方面ノ蓮華、烏帽子、野口五郎ノ槍、大天井、常念山脈ノ爺、八方、白馬山脈」と記されている。当時の山案内人はこれらを案内山行中に携行していた。これらの所有者であった小日向梅治は平村登山案内組合(後に平村登山案内人組合)に加入していたと思われる。

3-28 大和由松使用 ルックザック 当館蔵

有明の案内人・大和由松が昭和初期頃に使ったもの。昭和13年(1938)、東京・神田の片桐製
大正末期から昭和初期頃になると、山案内人も背負子に代わってこうした帆布製のいわゆるキスリングを使用して山へ行くようになった。由松は明治44年(1911)か大正元年(1912)頃から山案内を始め、後に有明案内人組合に加入した平村(現大町市)出身の有明村(現安曇野市穂高)の山案内人。当時としては珍しくスキーのできる案内人であり、昭和9年(1934)12月～翌同10年1月の京都大学白頭山(中朝国境上)遠征隊に芦崎の案内人・佐伯宗作とともに参加した。由松は山案内人が、猟師などの山人から派生した山案内人から近代的な山岳ガイドへと移り変わりつつあった過渡期に生きたひとりといわれる。

3-29 大和由松使用 ロープ 当館蔵

有明の案内人・大和由松が昭和初期頃に使ったもの。麻製

昭和初期頃から、それまでの農作業や山仕事の延長上にあつた道具や着物ではなく、岩登りや冬山登山に対応するために西洋式の登山用具や服装を取り入れる山案内人も現われるようになっていった。

3-30 アイゼン 当館蔵 《参考展示》

門田製。8本爪

昭和初期頃から国産のアイゼンが生産されるようになると、山案内人の中には、それまでの草鞋に鉄樫(かなかんじき)ではなく革製登山靴にアイゼンを着けたスタイルで春山や冬山登山に対応する者も増えていった。

関係略年表

西暦(年)	年号(年)	事 項	備 考
1847	弘化4	10月14日、嘉門次、信濃国筑摩郡稲核村明ヶ平(現長野県松本市安曇)で農業を営む父・有馬又七の次男として出生	
1851	嘉永4	5月18日、品右衛門(本名・里吉)、信濃国安曇郡野口村大出(現長野県大町市平)で農業を営む父・遠山新三郎(別名・長左衛門か?)、母・リセの長男として出生	嘉永6年、アメリカ使ペリー、浦賀来航
1858	安政5	夏、嘉門次(10才)、父・又七と上高地に入り、柚見習いとして明神付近の柚小屋でカシキ(炊事係)として過ごす	安政元年、日米和親条約締結
1860	万延10	嘉門次(12才か13才)、はじめてカモシカ猟に出かけて槍沢でカモシカをしとめる	
1864	元治元	夏、嘉門次(16才)、松本藩の藩有林見廻役の助手となり上高地滞在	
1866	慶応2	この頃、品右衛門(14か15才頃)、黒部溪谷に入るか?	慶応3年、大政奉還。王政復古の大本営
1868	明治元	嘉門次(20才か21才)、南安曇郡島々村(現松本市安曇)の上條孫次良の養子となり、孫次良の長女・さよと結婚	明治維新
1869	明治2	10月、品右衛門(18才)、北安曇郡常盤村(現大町市常盤)の荒井弥吾吉次女・きさと結婚	版籍奉還
1871	明治4	8月10日、嘉門次(23才)、長男・嘉代吉誕生	廃藩置県。明治6年、徴兵令公布。地租改正開始
1875	明治8	2月25日、喜作、筑摩県安曇郡西穂高村牧で農業を営む父・小林玉蔵、母・オカの次男として出生 この頃より、品右衛門(23か24才)、黒部川平に建てた小屋(平の小屋)を根拠地にして夏に釣りを行なうようになる	明治7年、本格的な三角測量開始
1877	明治10	3月15日、品右衛門(25才)、長男・作十郎誕生 7月、嘉門次(29才)、イギリス人冶金学者・ウィリアム・ガウランドらの槍ヶ岳登山を案内か?	明治9年、信越連帯新道開削工事着工(～翌年)
1878	明治11	7月、イギリス外交官・アーネスト・M. サトウ、退役イギリス海軍士官・A.G.S. ホースら、針ノ木峠越えなど。途中、平の小屋に宿泊か?	
1879	明治12	3月1日、大井庄吉、岐阜県吉城郡細江村数河(現岐阜県飛騨市)で出生	
1880	明治13	嘉門次(32才か33才)、明神池畔に小屋(嘉門次小屋)を持つ 12月15日、品右衛門(29才)、次男・兵三郎誕生	明治14年、サトウ、ホース編「中部および北部日本旅行案内」刊行
1884	明治17	9月5日、内野常次郎、岐阜県吉城郡上宝村中尾(現岐阜県高山市上宝)で父・内野長三郎、母・せんの次男として出生	
1885	明治18	夏、嘉門次(37才)、農商務省技師・坂市太郎の槍ヶ岳～鷲羽岳～薬師岳縦走を案内 この頃から、嘉代吉(14か15才)、小林区署の山仕事や炭焼きで稼いだり母・さよの養蚕を手伝ったりする	
1887	明治20	3月20日、品右衛門(35才)、三男・富士弥誕生 倉繁勝太郎、越後(現新潟県本庄部分)で出生(後年、明科に移り住み人力車の車夫をした後、大町に住まいを移す) この頃、喜作(11か12才頃)、牧の彌師・藤原浜吉(当時52か53才頃)に頼み、飯炊きや持子などとして彌へ連れて行ってもらう。 その後、堀金村の猿田弥太郎について(弟子入りして)、弥太郎の弟・猿田庄三郎とともに彌へ連れて行ってもらう	
1889	明治22	9月、帝国大学理科大学地質学者・大塚専一ら、針ノ木峠越えなど登山。途中、平の小屋に宿泊か?	大日本帝国憲法発布
1891	明治24	5月6日、品右衛門(41才)、四男・泰知誕生(その後、北安曇郡常盤村(現大町市常盤)の勝野嘉一郎の養子となる) この頃、喜作(15か16才頃)、牧の彌師・藤原為一郎(別名・為右衛門)に連れられてはじめて槍ヶ岳山頂に立つ	
1893	明治26	8月、嘉門次(45才)、陸地測量部測量官・館潔彦の前穂高岳登山を案内 8月、イギリス人宣教師・ウォルター・ウェストンら、彌師4名を案内・荷担ぎに、針ノ木峠越えなど登山。(彌師のうち2名は作十郎(当時16才)、品右衛門の妻・きさの弟・荒井永吉(当時20才)あるいは大西又吉(当時27か28才?)か?) 8月、嘉門次(45才)、島々の案内人・上條万作とともにイギリス人宣教師・ウォルター・ウェストンの前穂高岳登山を案内 兵三郎(13か14才)、品右衛門に連れられて山へ入るようになる	白馬岳などに一等三角点選定
1894	明治27	嘉代吉(22か23才)、日清戦争に召集され中国大陸へ出征。その後、大陸を転戦	志賀重昂著「日本風景論」刊行 日清戦争勃発(～1895年)
1895	明治28	この頃、品右衛門(43か44才頃)、高瀬川東沢で撃ち損じたクマに腰をかまれて大怪我を負う この頃、喜作(19か20才頃)、鍋冠山山麓の岩原の大野沢に作った鳥屋で彌をして過ごす	狩猟法公布(野生鳥獣保護)
1897	明治30	喜作(21か22才)、生家から独立して独力で牧に自宅を建てる 明治30年代、嘉門次(48～59才頃)、槍沢上部の播隆窪内に安置する播隆石像を背負い上げるか?	森林法公布(森林保全)
1901	明治34	6月28日、林平、北安曇郡平村野口(現大町市平)で父・遠山文彌、母・ひろの次男として出生 夏、内野常次郎(16才)が嘉門次(53才)につくため上高地に入る 12月、喜作(26才)、南安曇郡有明村(現安曇野市有明)のひろと結婚 この頃、大井庄吉(21か22才頃)が嘉門次(53か54才頃)につくため上高地に入る	
1902	明治35	1月、喜作(26才)、長男・一男が誕生 8月、横浜の小島鳥水(本名・久太)、岡野金次郎ら、彌師・筒木市三郎の案内により、槍ヶ岳登山。 途中、嘉門次(54才)不在の嘉門次小屋に泊まるか? 途中、喜作(27才)と牧の彌師・藤原為一郎と赤沢の岩小屋で出会い同宿か?	
1903	明治36	11月、嘉門次(56才)、信州側住人数名とともに、山林局長野大林区署書記・奥村深二の濁沢岳～焼岳縦走(森林境界査定)を案内 嘉門次(55か56才)、立教大学学長・G. タッカーの槍ヶ岳～穂高連峰縦走を案内	
1904	明治37	嘉代吉(32か33才)、日露戦争に召集され中国大陸へ出征。その後、旅順で負傷して内地送還	日露戦争勃発(～1905年)
1905	明治38	8月、南安曇郡の小学校教諭・丸山文台、高島野園、野本紫竹、槍ヶ岳登山。その際、嘉門次小屋宿泊 9月、島々の柚人・加藤市作ら3名、長野県木曾山林学校生徒・鶴殿正雄ら2名の前穂高岳登山を案内	山岳会(後に日本山岳会)発足
1906	明治39	7月、喜作(31才)、牧の寺島今朝一(後に信濃山岳会会員)とともに、奥穂高岳～西穂高岳縦走 8月、喜作(31才)、日本山岳会会員・志村鳥嶺(本名・寛)と高頭仁兵衛(本名・式)の燕岳～常念岳～槍ヶ岳縦走を案内 8月、細野の案内人・丸山市三郎、百瀬慎太郎と友人3名の白馬岳登山を案内	山岳会機関誌「山岳」創刊

西暦(年)	年号(年)	事 項	備 考
		夏、志村鳥嶺、前田囃山ら、針ノ木峠～立山登山。途中、平の小屋に宿泊、品右衛門(55才)に出会うか？	
1907	明治40	7月、中房の案内人・横沢類蔵、高山團衛、日本山岳会会員・志村鳥嶺の中房温泉～鳥帽子岳～鷲羽岳往復登山を案内 品右衛門(55か56才)、この頃までに、平の小屋のほかに黒部川上流の東沢出合と同川下流の御山谷出合にも小屋を持っており、山林局から山番(盗伐の監視役)を依頼されていたという	白馬岳の頂上石室小屋(現白馬山荘)が営業小屋として本格的に開業
1908	明治41	7月、嘉門次(60才)、3名(うち2名外国人)の槍ヶ岳登山を案内 7月、嘉門次(60才)、日本山岳会会員・辻村伊助ら4名の前穂高岳登山を案内 8月、嘉門次(60才)、日本山岳会会員・大平辰、夏目新治の槍ヶ岳登山を案内	
1909	明治42	7月、品右衛門(58才)、兵三郎(28才)、立山温泉からザラ峠を越えてきた日本山岳会会員・辻本満丸と越中の案内人らと黒部川平にて出会う。 同日、辻本らは大出の品右衛門宅に宿泊 7月、兵三郎(28才)、日本山岳会会員・辻本満丸の平～針ノ木峠～釜ヶ岳登山を案内 7月、嘉門次(61才)、日本山岳会会員・辻村伊助、ほか3名の槍ヶ岳～鳥帽子岳縦走を案内 8月、嘉代吉(38才)、東京府立第三中等学校(現両国高校)5年生・芥川龍之介、中塚英巳男、市村友三郎、中原安太郎の槍ヶ岳登山を案内 8月、嘉門次(61才)、嘉代吉(38才)とともに日本山岳会会員・鶴殿正雄、アメリカ人・ガレン・M. フィツシャーの穂高連峰～槍ヶ岳縦走 作十郎(31か32才)、東京の鉱山師・中井の釜ヶ岳～立山方面登山を案内	
1910	明治43	2月24日、嘉代吉(38才)、三男・孫人誕生 7～8月、兵三郎(29才)、大町の案内人・大西又吉、仁科春吉、宮田栄吉、遠山竜次とともに、日本山岳会会員・三枝威之助、中村清太郎、辻本満丸の鹿島槍ヶ岳～槍ヶ岳縦走を案内。その際、三枝らは品右衛門(59才)から道中の様子を聞いているほか、7月21日、黒部川へ向かう品右衛門(59才)と作十郎(33才)を針ノ木峠の雪上に鳴沢岳頂上から遠望している。また、一行は蓮華岳へコマクサ採りに来た2人組と出会う(1人は伊藤菊十と思われる) 7月、嘉門次(62才)、日本山岳会会員・辻村伊助、三枝威之助、ほか1名の霞沢岳登山を案内 8月、嘉門次(62才)、ほか7名とともに、日本山岳会会員・小島鳥水、ほか2名の槍ヶ岳～薬師岳縦走を案内 嘉門次(62か63才)、嘉門次小屋の正式な借地許可を得る	小島鳥水著「日本アルプス」第1巻刊行
1911	明治44	7月、嘉代吉(39才)、ほか1名とともに、日本山岳会会員・小島鳥水の穂高連峰～槍ヶ岳などの縦走を案内 7月、嘉門次(63才)、日本山岳会会員・小島鳥水の明神岳主峰～前穂高岳(明神5峰～前穂高岳間初縦走)を案内 8月、作十郎(34才)、大町の案内人・大西又吉、勝野玉作とともに、東京帝国大学OB・安倍能成、田辺重治、岩波茂雄ほか2名の裏銀座～立山などの縦走を案内 10月、品右衛門(60才)、作十郎(34才)、對山館主人・百瀬慎太郎の対山館～針ノ木峠～平(1泊)登山を案内	
1912	明治45 大正元	7月、嘉門次(64才)、上高地を訪れた東京高等師範学校附属中学校山岳会会員・浪沢敬三に写真を撮影される 8月、嘉代吉(40才)、妙義の案内人・根本清蔵、鳥々の案内人・谷口音吉とともに、イギリス人宣教師・ウォルター・ウェストンの槍ヶ岳東稜初登攀を案内 8月、嘉門次(64才)、妙義の案内人・根本清蔵、上高地温泉旅館主人・加藤惣吉とともに、イギリス人宣教師・ウォルター・ウェストンの奥穂高岳南稜初登攀を案内	
1913	大正2	7月、有明の案内人・横沢類蔵、北尾之助を案内して槍ヶ岳東稜尾根通過し赤岩岳から槍沢下降 8月、嘉門次(65才)、妙義の案内人・根本清蔵とともに、イギリス人宣教師・ウォルター・ウェストン、フランセス・ウェストンの槍ヶ岳東稜登攀(第2登、女性初登頂)を案内 8月、嘉門次(65才)、内野常次郎(28才)、妙義の案内人・根本清蔵とともに、イギリス人宣教師・ウォルター・ウェストン、フランセス・ウェストンの奥穂高岳南稜(第2登、女性初登頂)を案内 8月、作十郎(36才)と兵三郎(32才)、大町の案内人・勝野玉作とともに、對山館主人・百瀬慎太郎、日本山岳会会員・青木の槍ヶ岳などの縦走を案内 この頃から、品右衛門(61～63才頃)、晩年は大出の自宅南側に建つ西正院で近所の人に酒を盛り売りしたり日用品を売ったり、登山者に土産品を売ったりする	主要山岳地域の5万分の1地形図が陸軍参謀本部陸地測量部から一般発売
1914	大正3	1月、嘉代吉(42才)、大井庄吉(34か35才)とともに、日本山岳会会員・八木道三(号・是峰)の鳥ヶ徳本峠～上高地～中尾峠～蒲田温泉を案内。一行は上高地では嘉門次小屋を訪れ、出陣中だった嘉門次(66才)と出会う 7月20日、鬼窪善一郎、広津村樽尾(現安曇郡池田町広津)の農家で出生 7月、大町の案内人・大西又吉、對山館主人・百瀬慎太郎の葛温泉～東沢乗越～中房温泉登山を案内 7～8月、大町の案内人・傳刀林蔵、荷担び1名とともに、第一高等学校旅行部部員・大木操一らの鹿島槍ヶ岳～朝岳縦走を案内 8月、嘉門次(66才)、旅行の折に上高地を訪れたイギリス人宣教師・ウォルター・ウェストン、フランセス・ウェストンと再会 兵三郎(33か34才)、富士弥(26か27才)、東信電気の依頼を受け、作業員50名を先導して黒部峡谷に東信歩道(後に日電歩道となる)の開削工事に以後3年間従事(その間、富士弥は平の小屋で越冬)	第一次世界大戦勃発。日本、ドイツに宣戦
1915	大正4	3月、曾根原文平、大町八日町で蚕種業を営む家の五男として出生 5月、嘉門次(67才)、A.M. シャウ、ほか1名の前穂高岳登山を案内 7月、嘉門次(67才)、嘉門次小屋を訪れた大阪毎日新聞社の特派員記者・せみ郎(ペンネーム)から取材を受ける 7月、大町の案内人・傳刀林蔵、黒岩直吉、荷担び5名とともに、理学博士・一戸直蔵、大阪朝日新聞記者・長谷川如是閑、俳人・河東碧梧桐(本名・兼五郎)の針ノ木峠～鳥帽子岳～槍ヶ岳縦走を案内 嘉代吉(43か44才)、J.M. デーヴィスの前穂高岳登山を案内	焼岳噴火。大正池出現
1916	大正5	夏、常次郎(31才)、飛驒の案内人・今田重太郎とともに、地質学者・大関久五郎の笠ヶ岳～立山縦走を案内 嘉門次(68か69才)、ほか1名とともに慶應義塾山岳会会員・横有恒の穂高連峰～槍ヶ岳縦走を案内 嘉門次(68か69才)、佐伯藤之助の明神岳登山を案内 嘉作(40か41才)、登山者の槍ヶ岳登山を案内か？	信濃鉄道、松本～大町間全通 河野齡蔵・矢沢米三郎著「日本アルプス登山案内」刊行
1917	大正6	2月12日、作十郎、大出の自宅で死亡(享年39才。戒名・空法山園明清信士) 7月、嘉門次(69才)、嘉代吉(46才)、ほか荷担ぎ数名とともに、慶應義塾山岳会会員・藤山愛	大町登山案内者組合結成 東久邇宮、白馬岳登山

西暦(年)	年号(年)	事 項	備 考
		<p>一部、斎藤新一郎の穂高連峰～槍ヶ岳などの縦走を案内</p> <p>7月、大町の案内人・黒岩直吉、芦崎寺の案内人・佐伯政吉とともに、慶應義塾山岳会会員・斎藤新一郎の別山尾根～鷲岳～大窓(三ノ窓～大窓間の初縦走)を案内</p> <p>10月26日、嘉門次、島々の自宅で死去(享年70才。戒名・洋輝院仙前約月清居士)</p> <p>この頃、喜作(41～43才頃)、大天井岳から東鎌尾根経由の槍ヶ岳縦走路(喜作新道)の開削工事着手</p>	
1918	大正7	<p>7月、大町の案内人・佐藤静馬、佐藤朝義、勝野寿秋、慶應義塾山岳会会員・伊東弥六、豊田国臣の鹿島槍ヶ岳～八峰東面・口ノ沢?縦走(初踏破・初下降)を案内</p> <p>7月、大町の案内人・黒岩直吉、ほか2名とともに、慶應義塾山岳会会員・斎藤新一郎の鹿島槍ヶ岳～八峰キレット(後通しの第2踏破)を案内</p> <p>8月、常次郎(33才)、イギリス人宣教師・W.H.エルウィンの槍ヶ岳登山を案内</p> <p>喜作(42か43才)、一男(15か16才)、牧の案内人・寺島今朝一(後に信濃山岳会会員)、寺島政太郎(今朝一の弟)とともに、穂高三寿雄と山田利一が建てた槍沢ババの平のアルプス旅館(後に槍沢小屋に改名、現槍沢ロッジ)への物資補給のため、牧～一ノ沢～常念乗越～中山～二ノ俣のルート開発や荷上げに協力</p>	<p>有明登山案内者組合結成</p> <p>槍沢ババの平に前年建てられたアルプス旅館(後に槍沢小屋、現槍沢ロッジ)営業開始</p>
1919	大正8	<p>7月15日、嘉代吉、嘉門次小屋で死去(享年47才。戒名・功雲院夏山良勇清居士)</p> <p>8月、大町の案内人・佐藤静馬、宮原勇吉、内山忠春、日本山岳会会員・沼井鐵太郎の五龍岳～黒部川東谷下降～榎小屋沢通行などの登山を案内</p> <p>8月、喜作(44才)、常念小屋の落成式に際し、早稲田大学名誉教授・松田治一郎、養老館(後の五千尺旅館)建設者・井口良一、信濃鉄道・山口勝、鶴林堂書店店主・小松平十郎、信濃毎日新聞社・牧伊三郎らの常念岳登山を案内</p> <p>喜作(43か44才)、穂高三寿雄の西岳～大天井岳縦走を案内</p> <p>喜作(41か42才)、牧の寺島今朝一(後に信濃山岳会会員)、藤原為一郎、寺島松之助、田中伊十、増田伝七、宮島吾一とともに、常念口登山案内者組合の世話役となり、同組合結成</p>	<p>信濃山岳会発足</p> <p>常念口登山案内者組合結成</p> <p>常念坊乗越小屋(後に常念小屋)開業</p> <p>四ッ谷登山案内者組合</p> <p>長野県は主要山岳10ヶ所に石室設置を決定</p>
1920	大正9	<p>7月、喜作(45才)、荷担ぎ・浅川茂利とともに、信濃山岳会会員・土橋莊三、寺島今朝一、山田利一の鳥川～一ノ沢～槍沢～槍ヶ岳～北鎌尾根登攀(初踏破・初下降)などを案内</p> <p>7月、大町の案内人・伊藤菊十、荷運び・倉科智水、西沢国一とともに、竹内順次郎、竹内ヒサの鹿島槍ヶ岳～針ノ木峠縦走を案内(後立山連峰の女性初縦走)</p> <p>7月、大町の案内人・大西又吉、荷運び4名とともに、日本山岳会会員・田中喜左衛門、ほか1名の黒部川～上ノ廊下初踏破・初下降などを案内</p> <p>7～8月、大町の案内人・北澤清志、荷担ぎ・西沢亀重、清水彦男、細川紀通とともに、竹内順次郎、竹内ヒサの黒部横断などを案内(女性初の黒部横断)</p> <p>8月、喜作(45才)、北穂高岳滝谷付近で遭難した信濃山岳会会員・土橋莊三らを救助</p> <p>8月28日、品石衛門、大出の自宅で死亡(享年69才。戒名・空寿山泰道情信士)</p> <p>9月、喜作(45才)、喜作新道開削の協力を求めた中房温泉経営者・百瀬彦一郎(信濃山岳会会員)らとともに、新道の現地調査のために大天井岳から東鎌尾根経由で槍ヶ岳縦走</p> <p>秋、喜作(45才)、中房温泉経営者・百瀬猪三郎、百瀬彦一郎(信濃山岳会会員)親子の協力のもと、一男(18才)や牧、有明の住人20名前後も携わり、喜作新道の開削工事一応完了(本格的な完成は翌10年)</p> <p>10月、喜作(45才)、中房温泉経営者・百瀬彦一郎(信濃山岳会会員)、森林主事・小吹、ほか2名の(喜作新道経由)槍ヶ岳登山を案内</p>	<p>藤木九三郎、神戸でRCC結成</p> <p>東洋アルミニウムが黒部川上流域の開発の優先権を得て測量や開削に着手。黒部渓谷の電源開発開始(後に大正11年には日本電力に、昭和16年には日本発送電に吸収合併という形で引き継がれる)</p> <p>カモシカが天然記念物に指定</p>
1921	大正10	<p>秋、喜作(46才)、牧の大工・寺島文治らとともに、香からの突貫工事により殺生小屋(現殺生ヒュッテ)の建設工事完了</p>	<p>燕の小屋(後に燕山荘)開業</p> <p>横有恒、アイガー東山稜初登攀</p>
1922	大正11	<p>6月、喜作(47才)、殺生小屋を開業</p> <p>7月、喜作(47才)、学習院OB・板倉勝宣、松方三郎、伊集院虎一の天上沢～槍ヶ岳北鎌尾根登攀を案内</p> <p>夏、喜作(47才)、松本の務台英蔵の(喜作新道経由)槍ヶ岳～穂高連峰縦走を案内</p> <p>島々口登山案内者組合結成。大井庄吉(42か43才)、第1号組合員、内野常次郎(37か38才)、第2号組合員として同組合に加入</p>	<p>島々口登山案内者組合結成</p>
1923	大正12	<p>1月、喜作(47才)、松本の料亭・松本館で開かれた信濃山岳会の新年会に招かれ、山の話を行なう</p> <p>2月、大町の案内人・黒岩直吉、北澤清志、ほか大町登山案内者組合組合員13名とともに、伊藤孝一、百瀬慎太郎、赤沼千尋らによる雪の立山・針ノ木峠越えを目指して大町～大沢小屋まで案内</p> <p>3月5日、喜作(48才)、一男(21才)、上高地の猟師・大井庄吉、源坂の猟師・荒井矢蔵とともに出陣中、榎小屋沢の野陣場小屋で同宿した源坂の猟師・橋本千馬吉、杉浦清之助、大出の猟師・平沢美津男を含めた計7名と双方の猟犬計10頭が雪崩遭難。喜作と一男が死亡(喜作、享年48才。一男、享年21才)</p>	<p>関東大震災発生</p> <p>西岳小屋(現西岳ヒュッテ)建設</p> <p>イワナ保護のため明神池が禁漁区となる</p>
1925	大正14	<p>孫人(15才)、島々口登山案内者組合に加入</p>	<p>カモシカが禁猟となる</p> <p>日本山岳会、アルパータ初登頂</p> <p>長野県で登山者宿泊所及案内者取締規則が制定</p>
1926	大正15	<p>6月、大町の案内人・北澤清志、對山館主人・百瀬慎太郎と大阪毎日新聞社員・石川欣一の針ノ木峠～五色ヶ原～立山登山を案内</p>	<p>槍ヶ岳の小屋(後に槍ヶ岳山荘)に改名、現槍ヶ岳山荘)完成</p>
1927	昭和2	<p>6月、有明の案内人・中山彦一、大和由松、荷担ぎ・近藤一雄、法政大学の高橋栄一郎、信濃山岳会の土橋莊三による千丈沢の支流(一行はこの沢を中山沢と命名)から硫黄尾根・赤岳南峰の縦走を案内</p> <p>8月、常次郎(42才)、庄吉(47か48才)、飛騨の案内人・今田重太郎、中富政太郎、秩父宮家御用掛・渡辺八郎、慶應義塾山岳会OB・横有恒、早川種三、学習院山岳部OB・岡部長量とともに、秩父宮の槍ヶ岳～穂高連峰縦走に同行</p> <p>12月、早稲田大学山岳部部員11名、竜川谷赤石沢出合付近で雪崩遭難し、4名死亡。有明の案内人・大和由松、大町の案内人・板井一雄ら、救助・遺体捜索に参加</p> <p>12月、鹿島の案内人・宮坂治作、日本山岳会会員・小池文雄、山中金次郎の大冷沢北俣～布引山北の肩～鹿島槍ヶ岳南峰登山を案内</p>	
1928	昭和3	<p>3月、慶應義塾山岳会OB・大島亮吉、前穂高岳北尾根で遭難。常次郎(43才)、救助・捜索に参加し、同年6月に遺体発見</p> <p>この頃、昭和2年(1927)から上高地入りしていた長野県南安曇郡堀金村三田(現長野県安曇野市堀金)の木村植は常次郎(43か44才)について猟や釣りを行なうようになる</p>	<p>上高地が史蹟名勝天然記念物に指定</p>
1930	昭和5	<p>7月、有明の案内人・大和由松、京都大学山岳部部員・藤田喜衛、工業英司のスバリ岳～西面中尾根登攀(初登)、西尾根主稜登攀(初登)を案内</p> <p>8月、孫人(20才)、同志社大学山岳部部員・児島勘次とともに奥穂高岳直立ルンゼ東北稜登攀、ジャンダルム正面フェース・右ルート?初登攀</p>	<p>針ノ木小屋建設</p> <p>山と溪谷社から山岳雑誌「山と溪谷」創刊</p>

西暦(年)	年号(年)	事	項	備	考
		8月、大町の案内人・黒岩直吉、北澤清志、日本山岳会会員・冠松次郎、京都大学山岳部・渡辺漸、映画撮影隊員の鹿島槍ヶ岳東尾根登攀(初登)を案内 8月、有明の案内人・大和由松、東京農業大学山岳部部員・河内嘉吉の赤沢左保～針峰～赤沢山(初登)登攀を案内 12月、大町の案内人・櫻井一雄、櫻井親二(一雄の弟)、立教大学山岳部部員・堀田弥一、新波悌一郎、逸見真雄による鹿島槍ヶ岳(厳冬期初登頂)大冷沢北保鎌尾根(積雪期第2登・厳冬期初登)登攀を案内			
		孫人(19か20才)、同志社大学山岳部部員・児島勘次とともにコブ尾根の頭の飛騨側第2尾根登攀			
1932	昭和7	5月、大町の案内人・櫻井一雄、同志社大学山岳部部員・児島勘次の鹿島槍ヶ岳東尾根～天狗尾根(初踏破・初下降)登山を案内 12月～翌年1月、大町の案内人・櫻井一雄、櫻井親二、日本山岳会会員・小池文雄の烏帽子岳～赤牛岳(厳冬期初登)などの登山を案内			
1933	昭和8	3月、大町の案内人・櫻井一雄、荷担ぎ2名とともに、立教大学山岳部部員・小原勝郎、湯浅巖の鹿島槍ヶ岳天狗尾根登攀(積雪期初登)を案内			
1934	昭和9	12月～翌年1月、有明の案内人・大和由松、芦崎の佐伯宗作とともに京都大学白頭山(中朝国境上)遠征隊に参加			北アルプスが中部山岳国立公園として国立公園に指定
1935	昭和10	12月～翌年1月、大町の案内人・櫻井一雄、櫻井親二、立教大学山岳部部員・山根一雄ら13名の鹿島槍ヶ岳天狗尾根(厳冬期初登)北壁ピークリッジ(積雪期初登)登攀(糧地法による登山)案内 この頃、大町の案内人・櫻井一雄、ドイツのバイエルン社技師夫妻を黒部などへ案内			昭和11年、立教大学山岳部、ナンダコート初登頂 昭和12年、日中戦争勃発
1938	昭和13	孫人(27か28才)、登歩渓流会会員・松清明とともに積雪期の西徳高岳登山			
1939	昭和14	10月、孫人(29才)、登歩渓流会会員・松清明とともに北穂高岳滝谷第1尾根Cフェース・ノーマルルート初登攀 12月、孫人(29才)、登歩渓流会会員・松清明とともに北穂高岳滝谷第1尾根登攀(積雪期初登攀)			昭和16年、太平洋戦争勃発 昭和20年、日本、ポツダム宣言受諾。降伏文書調印(終戦) 日本国憲法公布
1946	昭和21	8月、松本の伊藤正一、友人2名とともに、槍ヶ岳～三俣蓮華岳～湯沢川縦走。伊藤は終戦後に三俣小屋を取得したものの荒廃して管理者不在となっていた小屋で過ごしていた富士弥(59才)と出会う 9月、大町の案内人・傳刀林蔵、カナダ山岳会会員・ドクトル、カーターの槍ヶ岳～徳高連峰縦走を案内			
1947	昭和22	6月頃、富士弥(60才)、勝太郎、善一郎、林平、松本の伊藤正一の依頼を受けて三俣小屋に集結。以後、昭和25年頃まで三俣小屋を再建にたずさわる			山岳雑誌「岳人」創刊
1948	昭和23	8月、大町の釣師・曾根原文平、黒部川御山谷合の日電小屋で富士弥(61才)に出会う。以後、富士弥が山を降りるまでの昭和24年まで2人で組んでイワナを釣る			
1949	昭和24	12月11日、常次郎、生家で死亡(享年65才)。戒名・常道是心居士)			
1953	昭和28	勝太郎、中風により死亡(享年65か66才)			昭和27年、上高地が特別天然記念物、特別名勝に指定 長野県観光案内業条例公布
1954	昭和29	11月5日、兵三郎、大出の自宅で死亡(享年73才)			昭和30年、カモシカが特別天然記念物に指定
1958	昭和33	明神池畔に嘉門次のレリーフ(松本の彫刻家・上條俊介制作)石碑建立 大天井岳付近岐切通岩に喜作のレリーフ(彫刻家・小川大系制作)設置			昭和31年、日本山岳会、マナスル初登頂
1966	昭和41	3月3日、富士弥、死亡(享年78才)			
1967	昭和42	10月、常次郎小屋隣に建てられた常次郎の記念碑除幕式開催			
1971	昭和46	10月、作家・山本茂実らの参加を得て、喜作祭実行委員会により第1回喜作祭開催。以後、毎年開催			立山黒部アルペンルート開通
1974	昭和49	秋、林平、死亡(享年73才)			昭和47年、自然環境保全法制定
1976	昭和51	7月13日、孫人死去(享年66才。戒名・徳照院祖岳静禅清居士)			昭和50年、上高地のマイカー乗り入れ規制開始

(市立大町山岳博物館作成)

注 ここでは北アルプスの長野県側を拠点に暮らした猟師や樵など山人や初期の山案内人たちに関して、嘉門次、品右衛門、喜作の3人を中心に、主な出来事や登山記録などを記した。嘉門次、品右衛門、喜作に関する事項についてはゴシック体で表記した。なお、年齢はその時点での満年齢を示した。備考欄には同時代の出来事から関係する主な事項を参考までに記した。

この年表は、嘉門次に関しては主に佐藤賢著「アルプスの主 嘉門次」(朝日新聞社、1963)の年譜、「三代の山—嘉門次小屋100年のあゆみ」(上条輝夫、1979)の年譜の内容をもとに、品右衛門に関しては主に佐藤賢氏旧蔵資料(市立大町山岳博物館蔵)、甲山五一著『釣り師 遠山品右衛門』(アテネ書房、1983)、瓜生卓造著『おおまち物語』(山と溪谷社、1976)、中村周一郎著『黒部の主・遠山品右衛門』(北アルプス開発誌 山小屋創始者と山案内人伝)(郷土出版社、1981)、伊藤正一著『新版 黒部の山賊—アルプスの怪—』(実業之日本社、1964)、鬼窪善一郎述／志村俊司編『黒部の山人』(白日社、1989)、曾根原文平著『イワナII・黒部最後の職漁者』(白日社、1989)の内容をもとに、喜作に関しては主に山本茂実著『喜作新道—ある北アルプス哀史—』(朝日新聞社、1971)、佐藤賢氏旧蔵資料(市立大町山岳博物館蔵)、菊地俊朗著『北アルプス この百年』(文藝春秋、2003)の内容をもとに、そのほかの山人や初期の山案内人に関しては主に『日本登山史年表』(山と溪谷社、2005)、山崎安治著『新稿 日本登山史』(白水社、1986)の内容をもとにし、別掲の参考文献ならびに本書の総論として菊地俊朗氏にご執筆いただいた解説の内容を参考にして作成した。

参考文献

- 辻本満丸著「祖父ヶ岳の二日」『山岳』第4年第3号(日本山岳会事務所、1909)
- 三枝威之介・中村清太郎・辻本満丸著「後立山連峰縦断記」『山岳』第6年第1号(日本山岳会、1911)
- 百瀬慎太郎著「ガイドの事ども」『山岳』第10年第2号(日本山岳会、1915)
- 『山岳』第12年第2-3号(日本山岳会事務所、1918)
- 『山岳』第13年第2号(日本山岳会事務所、1919)
- 藤山愛一郎著「穂高より槍ヶ岳へ」はか『登山行』第1年第1号(巖波山岳会、1919)
- 松方三郎著「著作の場合」『アルプス記』(龍聖閣、1937)
- 松松次郎著「四季のたかね」(山と溪谷社、1955)
- 『日本アルプスのぬし - 上乗嘉門治 -』大町山岳博物館編『やまと博物館』No.9(大町山岳博物館後援会、1956)
- 志村貞雄著「近代登山草むけのころ」大町山岳博物館編『山と博物館』第3巻第5号(大町山岳博物館、1958)
- 河山重重著「遠山品石南門築造品」『山と博物館』第6巻第1号(大町山岳博物館、1961)
- 百瀬慎太郎著「案内人たちの横顔(下)」『新編新羅』(1947)『山を想へば』(百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962)
- 百瀬慎太郎著「針の本峠雑談」『山々々々』(1948)『山を想へば』(百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962)再録
- 『山を想へば』(百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962)
- 佐藤貞著「アルプスの主 嘉門次」(朝日新聞社、1963)
- 木村肇著「上高地の大蒼 アルプス暮し四十年の記録」(実業之日本社、1970)
- 山本茂美著「著作新道 - ある北アルプス史実 -」(朝日新聞社、1971)
- 荒井今朝一著「大町山岳山案内抄録 - その1 -」『山と博物館』第19巻第11号(大町山岳博物館、1974)
- 荒井今朝一著「大町山岳山案内抄録 - その2 -」『山と博物館』第20巻第1号(大町山岳博物館、1975)
- 荒井今朝一著「大町山岳山案内抄録 - その3 -」『山と博物館』第20巻第3号(大町山岳博物館、1975)
- 瓜生卓造著「おおまち物語」(山と溪谷社、1976)
- 『三代の山 - 嘉門次小屋100年のあゆみ』(上条輝次、1979)
- 『長野県スポーツ史』(信濃毎日新聞社、1979)
- 平林武夫著「丸山充義君を想ひむ」(『黒部信州』第84号(1966))平林武夫先生遺稿集刊行会編『残雪』(信濃教育会出版部、1979)再録
- 三井嘉彦著「著作新道の周辺」『山と博物館』第25巻第6号(大町山岳博物館、1980)
- 中村史一郎著「北アルプス開発誌 山小屋開拓者と山案内人列伝」(郷土出版社、1981)
- 宮沢文人著「湯沢温泉の噴湯丘」『山と博物館』第28巻第10号(大町山岳博物館、1981)
- 吉田博・日康史郎著「講談社出版研究所編『山の絵本 日本アルプスと富士』(講談社、1981)
- 青木治著「北アルプス著作新道の著作祭」『山と博物館』第27巻第7号(大町山岳博物館、1982)
- 甲山五一著「釣り師 遠山品石南門」(アテネ書房、1983)
- 日本山岳会信濃支部編「日本山岳会信濃支部三十五年」(日本山岳会信濃支部、1984)
- 吉川金次著「ものと人間の文化史5」芥・撃・鉤(法政大学出版局、1984)
- 山崎安治著「新編 日本登山史」(白水社、1986)
- 平塚一郎著「氷斧とピッケル」『山と博物館』第32巻第2号(大町山岳博物館、1987)
- 峯村隆著「古い写真をめぐる」『山と博物館』第32巻第8号(大町山岳博物館、1987)
- 吉田博著「吉田博 全木版産業」(阿部出版、1987)
- 『W・ウェストン年譜 文久元年(1861)～明治29年(1895)』日本山岳会会報『山岳』第82年(日本山岳会、1987)
- 鬼塚善一郎述/志村俊司編『黒部の山人』(白日社、1989)
- 曾根原文平著「イワナII・黒部最後の職漁者」(白日社、1989)
- 『W・ウェストン年譜 その3 明治44年(1911)～大正4年(1915)まで』日本山岳会年報『山岳』第84年(日本山岳会、1989)
- 『W・ウェストン年譜 その4 大正5年(1916)～昭和15年(1945)まで』日本山岳会会報『山岳』第85年(日本山岳会、1990)
- 柳原修一著「北アルプス山小屋物語」(東京新聞出版局、1990)
- 布川敏一著「山道具が語る日本登山史」(山と溪谷社、1991)
- 宮本賢太郎編「図録・民具入門事典」(柏書房、1991)
- 伊藤正一著「新版 黒部の山脈 - アルプスの怪 -」(実業之日本社、1995)
- ウォルター・ウェストン著/銅村精一訳 平凡社ライブラリー 94『日本アルプス 登山と探険』(平凡社、1995)
- 柳原修一著「北アルプス やまびと物語」(東京新聞出版局、1995)
- アーネスト・サトウ編著/庄田元男訳『明治日本旅行案内(下巻)ルート編目』(平凡社、1996)
- 牛丸工著「上高地の常きん 山に生きた男の物語」(信濃毎日新聞社、1996)
- ウォルター・ウェストン著/水野勉訳 平凡社ライブラリー 16『日本アルプス再訪』(平凡社、1996)
- 小島水著「槍ヶ岳からの黎明」平凡社ライブラリー 175『アルピニストの手記』(平凡社、1996)
- 松方三郎著「著作の場合」平凡社ライブラリー 203『アルプス記』(平凡社、1997)
- 穂高三寿雄・貞蔵著「槍ヶ岳開山 挿絵(改訂版)」(大修館書店、1997)
- 安曇村誌編集委員会編『安曇村誌』第2巻 歴史 上(安曇村、1997)
- 安曇村誌編集委員会編『安曇村誌』第3巻 歴史 下(安曇村、1998)
- 『岳とともに 先達 大町登山案内人組合創立80周年記念誌』(大町登山案内人組合、1999)
- 大町山岳博物館編『新・北アルプス博物誌 - 山と人と博物館 -』(信濃毎日新聞社、2001)
- 大日方健著「西丸棟師用の「入山札」(御禮札) - 信越連峰新道とは別物です -」『山と博物館』第46巻第11号(市立大町山岳博物館、2001)
- 小泉武栄著「登山の誕生 人はなぜ山に登るようになったのか」(中央公論新社、2001)
- 『旭谷遺跡調査報告書』(旭谷町教育委員会、2001)
- 八十周年記念誌編集委員会編『有明登山案内人組合六十周年記念誌 岳の道標』(有明登山案内人組合、2001)
- 大町山岳博物館編『ブルーガイド探検本 上高地 安曇野 輝ける大地の自然と人』(実業之日本社、2002)
- 市立大町山岳博物館編『対山館と百瀬慎太郎 - 岳部大町に花開いた登山文化の原点を探る -』(市立大町山岳博物館、2002)
- 富山県[立山博物館]編『富山県[立山博物館]平成14年度特別企画展 絵巻に見る加賀藩と黒部奥山』(富山県[立山博物館]、2002)
- 横濱市歴史博物館・神奈川県立日本民俗文化研究所編『歴史の博物館 - 実業家渋沢武三が育った民の空間 -』(横浜歴史博物館・財)横浜市ふるさと歴史財団、2002)
- 相澤亮平著「飯嶋家文書と信越連峰馬道 - 市文化財指定にあたって -」『山と博物館』第48巻第7号(市立大町山岳博物館、2003)
- 『企画展 大町市文化財指定 飯嶋家文書特展小冊子 - 国境の山河に刻まれた先人の軌跡 -』(大町市文化財センター、2003)
- 菊地俊樹著「北アルプス この百年」(文藝春秋、2003)
- 『狩猟誌本』(大日本猟友会、2003)
- 関信志著「大町登山案内者組合のはじまり(前)」『山と博物館』第49巻第3号(市立大町山岳博物館、2004)
- 関信志著「大町登山案内者組合のはじまり(後)」『山と博物館』第49巻第4号(市立大町山岳博物館、2004)
- 伊藤主著「弥生時代の光」『ななかまど』第8号(三俣山荘事務所、2005)
- 市立大町山岳博物館編『北アルプスの自然と人 市立大町山岳博物館展示案内』(市立大町山岳博物館、2005)
- 『日本登山史年表』(山と溪谷社、2005)
- 『目で見る日本登山史』(山と溪谷社、2005)
- 富山県[立山博物館]編『富山県[立山博物館]平成16年度企画展 山登活阿 大正末、雪の絶縁にカメラを廻す』(富山県[立山博物館]、2005)
- 歴史手帳付録「世界史重要年表」『歴史手帳 2006』(吉川弘文館、2005)
- 菊地俊樹著「白馬島の百年 近代登山発祥の地と最初の山小屋」(山と溪谷社、2005)
- 安倍能成著「たいらの小屋」(山中雑記)(岩波書店、1924)『山桜特別号「学習院登山史(1) - 1887-1953 -」(学習院輔仁会山岳部・山桜会、2006)再録
- 山桜特別号「学習院登山史(1) - 1887-1953 -」(学習院輔仁会山岳部・山桜会、2006)
- 岡谷産米博物館紀要編集委員会編『岡谷産米博物館紀要10号』(2005)(岡谷市教育委員会、2006)
- 『歴史のなかの秩地伝来 種子島から戊辰戦争まで』(国立歴史民俗博物館、2006)
- 佐藤賢氏旧蔵資料(市立大町山岳博物館蔵)

謝 辞

企画展開催にあたり、下記の個人・団体の皆様ならび関係機関から、貴重な資料のご出品をはじめ、貴重な写真のご提供や資料撮影・所在調査などにおきまして、多大なご協力・ご教示を賜りました。ここにご芳名を記して心より深く感謝の意を表すとともに、厚くお礼申し上げます。

相澤亮平
安曇野市穂高教育課
伊藤正一
浦沢昌徳
奥飛観光開発株式会社
菊地俊朗
腰原正己
小林 貢
曾根原佳枝
西岡一成
穂苅貞雄
松本市安曇資料館
宮島順一
山本信雄

安曇資料館地域資料室
安曇野市穂高郷土資料館
井原多寿子
大町市文化財センター
加藤 茂
黒岩俊夫
小谷宗司
櫻井幸雄
遠山茂雄
長谷川聡貞
北陽建設株式会社
松本市立博物館
百瀬 堯

安曇野市教育委員会社会教育課
飯嶋善士
牛丸 工
奥原貞夫
上條輝夫
黒野こうき
小林利二
新穂高ビジターセンター山楽館
長野県製薬株式会社
日野製薬株式会社
細萱亜矢
宮沢洋介
山田恒男

(五十音順、敬称略)

北アルプス 山人たちの系譜

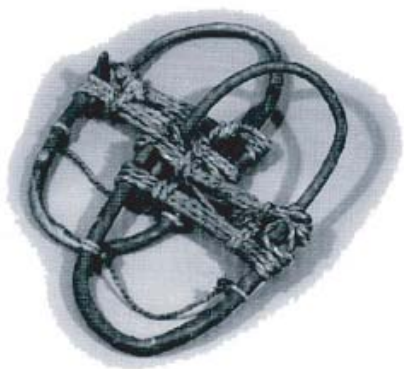
—嘉門次、品石衛門、喜作 登場の背景—

発行日 2007年1月27日
発行/編集 市立大町山岳博物館
〒398-0002 長野県大町市大町8056-1
TEL: 0261-22-0211/FAX: 0261-21-2133
E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷・製本 榎奥村印刷
〒398-0002 長野県大町市大町2470
TEL: 0261-22-0205/FAX: 0261-22-1345

©Omachi Alpine Museum 2007 Printed in Japan



この解説書は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。



市立大町山岳博物館

〒398-0002 長野県大町市大町8056-1
TEL : 0261-22-0211 / FAX : 0261-21-2133
E-mail : sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL : <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>

2007